
Fate/IF a tale of the justice

N I S I O I S I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / I F a t a l e o f t h e j u s t i c e

【Nコード】

N 6 4 3 9 W

【作者名】

N I S I O I S I N

【あらすじ】

正義の味方を理想としてその果てに絶望へと至り、過去の自分に復讐を誓った”英霊エミヤ”。その願いを叶えるために、正史と異なる第四次聖杯戦争をエリート魔術師ケイネス・エルメロイ・アーツボルト共に戦い抜く。 第零章 Fate/Zero 編 執筆中。かなり難解な型月世界の二次創作ですが、完結を目指したいと思えます。 多少の独自の設定や解釈が入ります。 一部原作キャラが原作とは全くの別人となっています。

第零夜・プロローグ・（前書き）

これは正史と異なる役者によって行われる第四次聖杯戦争のIFとなります。また、これは月姫2まで続くストーリーの第零章となります。

第零夜・プロローグ

「……………敵のサーヴァントかしら？」

「はい。どうやら、我々を誘っているようです」

極東の地である日本。

その中でも邸宅等の古い町並みを残す”深山町”と急激に近代的な発展が行われた”新都”この二面性を持つ”冬木市”。

加えて、日本でも有数の質の高い霊脈を持つ霊地でもあるこの地で、日本という国において明らかに浮き世離れな容姿と服装をした、二人の絶世の美人が言葉を交わしていた。

片や、雪華の如く輝く銀髪に赤い瞳という容貌と、さらにはその寶石のような美貌とが合わさって人間離れした風情と成っている貴婦人　アイリスフィール・フォン・アインツベルン。

片や、絹のような金髪に瑠璃色の瞳の美少女でありながら、ドレスシャツにネクタイとダークスーツという完全なる男装を決めていて、逆に絶世の美少年にも感じられる騎士　アルトリア・ペンドラゴン。

二人は、この冬木の地で行われるとある戦争に参加する、仮のマスターとサーヴァントの関係にある。

聖杯戦争。

あらゆる願いを叶えることができる万能の願望機である聖杯を、七人のマスターと七騎のサーヴァントで奪い合うバトルロワイヤルである。

マスターには聖杯に願いを持つ魔術師が選別され、その魔術師によって召喚される伝説に名を残す英雄の霊　英霊を使い魔（サーヴァント）として契約・使役して、最後まで勝ち残った組が聖杯を手に入れるというシステムである。

そして現在、冬木市では史上四度目となる聖杯戦争が開催されようと　否、既に闘争の幕は開けられているのであった。

証拠に、剣のサーヴァントとして召喚されたアルトリア　かのアーサー王である　に備わっている互いにサーヴァントの気配を感じ取る能力に、まるで挑発するかのように此方へ向けて強烈な気配を放つ存在がいた。

しかし、その気配はセイバー達の前に姿を現そうとはせず、逆にゆつくりと遠ざかって行く。

先にセイバーの指摘した通り、十中八九、敵サーヴァントの誘い込みである。

「……アイリスフィール」

「ええ。恐らく相手も同じ。自分の気配を餌にしてサーヴァントを

誘い出す……真っ向勝負を望みとしたサーヴァントでしょうね」

「はい。相手に取って不足はないでしょう」

「なら、お招きに与るとしましょう」

「了解です。アイリスフィール」

二人の主従は、絶対的な自信を持って気配を追って行く。

例え、これが自分達を罠に嵌めるものだったとしても、罠ごと敵を踏破するだけの自負とそれを裏付ける実力を、確かに彼女達は持ち合わせていた。

だが、流石の彼女達もこの戦いが現世に招来された七騎のサーヴァントの内、六騎が集結する混戦となることは予想だにできなかっただろう。

人気の完全に失せた、延々とプレハブ倉庫の並ぶ、海浜公園の東側

に隣接する倉庫街。

そこに広がる四車線の道路を、セイバーとアイリスフィールは、挑発に乗った挑戦者として威風堂々と進む。

無人の大通りに敵もまた、剣の主従とは違いマスターの隣に待たず一人で佇んでいた。

そして、二人のサーヴァントは十メートル程の間合いを隔てて、対峙した。

セイバーは、目の前に立ちはだかる長身の男を

己の、

ひいては己のマスターの願望を叶える為の最初の障害を、その身に宿す実力までも見透かすように睨みつける。

自分にとっては苦渋の記憶ではあるが、仮にも王であった己の人の力を測る眼力には自信があった。

故に、セイバーが率直に抱いた感想は、敵サーヴァントの行動が解せないというものだった。

目前のサーヴァントは

弱い。

戦闘の要となる筋力・耐久・敏捷のステータスが、ほぼセイバーと比較して二ランク程下回っている。

魔力と幸運はセイバーと互角ではあるが、セイバーのように『魔力放出』のスキルを持つかキャスターでもない限り、サーヴァントの魔力量が純粋な戦闘の勝敗を左右することはない。

だというのに、此方に戦闘をふっかけた敵のサーヴァントの意図が

読み取れなかった。

戦場選ばれたこの場に畏の気配が全く無いのだから尚更である。

と。

そんなセイバー達の困惑で微妙になっていた空気の中、唐突に敵サ
ーヴァントが口火を切った。

「ふむ。私のこのような誘いにあっさりと乗るとはな……………余程腕
に自信があるのか、畏の可能性を鑑みない愚か者か。
君らはどちらなのかね？」

そう、赤き外套を纏いし錬鉄の英雄は問い掛けた。

第一夜・英霊召喚

時計塔

倫敦は大英博物館に存在する建造物かつ組織の名称であり、世界中に隠れ潜んでいる魔術師達を管理する団体　魔術協会の総本山である。

この建物に数多くある魔術師の工房の一室にて、一組の男女がとある儀式に取り組んでいた。

「ねえ、ケイネス。本当にこれで大丈夫なの？」

「問題ないよ、ソラウ。降霊科学部長を歴任するソヒリアリ家の子女である君には信じ難いかもしれないが、英霊の召喚には大規模な降霊は必要ない。実際にサーヴァントを現世へと招き寄せるのは聖杯の役目であり、我々召喚者であるマスターは、その実サーヴァントが現界するのに必要な魔力を供給しさえすればいい」

魔術によって水銀を操り、魔法陣を形成していた男は、己の功績を語るかのように自信を膨らませ、胸を張りながら説明をする。

この男も、聖杯によって選ばれた魔術師の一人であり、時計塔にて若年ながらも一級講師を勤め、ロード・エルメロイと称される、九代も続く伝統的家系の天才魔術師　ケイネス・エルメロイ・アーチボルトである。

だが、彼の説明に不満があるのか、傍らに立つ女性
ソ
ラウ・ヌアザレ・ソヒィアリは表情をしかめた。

ちなみに、ケイネスとは古い好よしみであり婚約者でもある。

「あのねえケイネス、私が言いたいのはそのうちのことではないわ。
私が言っているのは、”盗まれた聖遺物”の代わりを用意せず、何
の縁も無しに召喚に臨むつもりなのかしら？　と言いたいのよ」

そんなソラウの言葉に、ケイネスは嫌な事を思い出したかのように、
苦虫を噛み潰した表情をした。

「……それも問題ないさ。君の父君の下で降霊術を学び極めた、私
だ。縁となる聖遺物なしでも特上の英霊サーヴァントを呼び出してみせるさ」

「そう。期待しているわ」

言葉とは裏腹に、ぞんざいな感じで言い放つソラウ。

そんなソラウの態度が、ケイネスのプライドに火を付けてしまった
のか、先程までとは一線を画する精度で、呪文詠唱と並列しながら
水銀を操作して魔法陣を完成させる。

そして仕上げに、魔法陣の中心に剣を設置した。

この剣は、上等な魔剣でこそあれ、歴史を持たない、英霊の宝具に

は遠く及ばない一品である。
ケイネスの、せめて最優のサーヴァントであるセイバーを手中に収めようという、苦肉の策であった。

剣を設置し、英霊召喚の儀式の前準備の工程を全て終了したところで、ケイネスは精神を統一し、己の魔術回路を励起させる。とうとう、召喚の呪文詠唱の段階へ踏み込もうとしていた。隣りのソラウも、表情が真剣なものへと変化していく。

そして

ケイネスの口より第一句が紡がれる。

「 告げる 」

魔法陣に流されたケイネスの魔力が、スパークの如く強烈に発光し、荒ぶる疾風を巻き起こす。

「 汝の身を我が下に、我が命運は汝の剣に。」

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うなら応えよ。

誓いをいじらば。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、

天秤の守り手よ

「！」

稲妻の如く轟く閃光と、吹き荒ぶ嵐の如き風圧の中から、超上かつ
至高の存在たる英霊が
今、姿を現した。

召喚された英霊を視認したと同時に、ケイネスに湧き上がった感情は、高揚と落胆であった。

英霊の見た目は、黒い鎧に赤い外套を纏った、騎士を思わせる風貌から、”当たり前”である感じた。

が、ケイネスの意識に流れ込んできた目の前のサーヴァントのクラスとステータスは、ケイネスの思惑から大きくかけ離れたものであった。

「問おう。汝が我を招きしマスターか」

「……………そうだ。私が貴様のマスターだ」

ケイネスは、表面上は自分の胸の内を晒さないよう、なんとか取り繕っていた。

「そうか。ならば、ここに契約は成立した」

目の前の赤き騎士が告げると同時に、ケイネスは令呪から熱が発せられたのを感じた。

どうやら、無事に契約が終了したらしいことに、ひとまず安堵する。しかし、すぐに表情を険しくした。

「さて……………私の質問に答えて貰おうか。貴様は何者だ

? 真名は!? 宝具は!? 全て白状しろ!!」

矢継ぎ早にくり出されるケイネスの質問に対して、赤き騎士は意に

介した様子もなく泰然自若といった有様で、
ツと皮肉げに口元を歪めて笑っただけであった。

ただ、フ

「何が可笑しい？」

「いや。なに、少し落ち着くことをお勧めするぞマスター。取り乱した様が、あまりにも滑稽だ」

「貴様 ……！」

「ケイネス！」

サーヴァントの言葉に、顔を憤怒よる激昂から赤くするケイネスだったが、許婚の一言によって幾分の平静を取り戻すことが出来た。

「くっ！……ならば、まずは貴様が何処の英雄か聞かせて貰おうか。フェイカー（……）のサーヴァントなぞ、聞いたこともないわ」

「ふむ。言葉通りに受け取ってくれて構わんよ。私は偽物……紛い物同然の英雄だ」

どこか自虐的な響きを含ませて、赤きサーヴァントは淡々と答えた。

「……答えになつたらんぞ。真名だ、貴様の真名を言え！」

「それは答えるまでもない。私は、未来より招かれし英霊……故に、私の真名を知ることには意味はない」

「未来の英雄……だと……？」

己の召喚したサーヴァントの語る衝撃の事実に、魔術師という常識な世界に身を置く存在であるケイネスも、にわかには信じ難い話しであった。

「その話しは、本当のことなの……？」

ソラウも同じ気持ちなのであろう。

あくまで質問の形を取りながらも、その声音は疑心暗鬼に満ちていた。

「ああ。間違い無く、私は未来より招来されし者だ」

淀みなく、ハッキリと答えるフェイカー。

そんな彼の頑なな態度に、さしものケイネスも、フェイカーの言葉を真実として受け止めざるを得なかった。

「ぬう………だったら、貴様の宝具はどうなっている？」

「マスターならば私のステータスは見えているだろう？ 宝具欄にはランクがない、すなわち私が自分自身の宝具は所持していないということだ」

「 ああ………」

表情を取り繕うことを止めて、落胆を露わにするケイネス。思わず、膝までも床に着いてしまっている。

無理もない。

これから挑む聖杯戦争の要の駒となるサーヴァントが、平均的で取り得の無いステータスであることに加えて宝具を所持していないと来た。

いくら自分が優秀な魔術師であろうと、サーヴァントの相手はサーヴァントにしか務まらない。

これは、覆しようのない事実であった。

ここまで脆弱なサーヴァントでは、自分の力でも補いきれない

と、ケイネスの心は折れかけていた。

しかし、フェイカーはそんな心内を見透かしているかの様にケイネスへと告げる。

「そう悲嘆するな、マスター」

「？」

己のサーヴァントを、頭を上げて見つめるケイネス。

「確かに私の能力は、一見物足りないものかもしれん。だがそれでも、この身が他のサーヴァント共に劣ることは決してない」

「……本当か？」

「ああ」

フェイカーは口角を吊り上げ、クツと笑った。

自信に満ちた笑みであった。

「この戦い……最後まで勝ち残るのは我々だ」

こうして、かつて正義の味方を夢想した錬鉄の英雄の新たな戦いの幕が開けた。

彼の者の戦いの果てに待ち受けるのは、希望か、絶望か。

未来の英雄でさえも、知ることは無かった。

第一夜・英霊召喚・（後書き）

第零章の主人公を務めるエミヤは、別に答えを得たりしていないエミヤです。

正義の味方に絶望している彼は、凜がマスターでないことも相まって、衛宮切継なんて目じゃない程の外道っぷりを披露します。

……ってのは言い過ぎですけど、綺麗なエミヤがみたいという人は終盤近くまで待たないとダメかも。

こんな作品ですが、よろしくお願いします。
批評・感想お待ちしています。

第二夜・マトリクス・

【クラス】	フェイカー
【マスター】	ケイネス・エルメロイ・アーチボルト
【真名】	エミヤ
【性別】	男性
【身長・体重】	187cm 78kg
【属性】	中立・中庸
【筋力】	D
【耐久】	D
【敏捷】	C
【魔力】	A
【幸運】	D
【宝具】	-

【クラス別能力】

複写：C

サーヴァントのクラス別能力をコピーする。

自分のマスターがステータスを確認したサーヴァント限定。
複数のサーヴァントの能力はコピーできない。

コピーした能力はランクが2ダウンする。

模倣：C

サーヴァントの保有スキルを1つまでコピーする。

フェイカー自身が確認したサーヴァント限定。

コピーしたスキルはランクが2ダウンする。

贗作造使：A

投影魔術を補助する能力。

宝具投影によるランクの低下をランダムで抑え（ランクが高い程期待値は低い）、魔力の消費量が抑えられる。

ただし、神造宝具に関しては約2ランク以上の低下が発生し、ものによっては投影すら不可能。(例：乖離剣エア)

【保有スキル】

千里眼：C

視力の良さ。

遠方の標的の補足、動体視力の向上。

魔術：B-

多少応用の利いたオーソドックスな魔術を習得。

本質は特殊属性の一点特化型。

心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。

窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

【宝具】

アンリミテッド・ブレイド・ワークス

無限の剣製

ランク：E→A++

種別：-

レンジ：-

最大補足：-

魔術師にとって最大の奥義かつ禁呪である固有結界と称される魔術。術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、内部空間そのものを変えてしまう。

エミヤの固有結界は、燃え盛る炎と、一面に広がる無限の剣が突き立てられた荒野と、空中に回転する巨大な歯車が存在している。

能力は、「結界内に存在する”剣を構成する要素”により、一度目視した刀剣の類を複製し、結界内に貯蔵するというもの。

一度貯蔵したものは、固有結界を展開しなくても自由に取り出せる（これがエミヤにとっての”投影”魔術）。

オリジナルよりランクが一減少する（クラス別能力である程度緩和可能）が、宝具も複製可能。また、エミヤ程の腕前があれば刀剣類に限定されずに複製できる。

【人物像】

未来において、魔術使いの少年・衛宮士郎が、この世の全てを救える”正義の味方”という理想を追い求めた果てに、自分の死後と引き換えに世界と契約して英雄へと至った姿。

英雄になれば全てを救えると信じ、無償で多くのものを救っていたが、結局は自分の救った相手に裏切られて殺されるという報われない最期を迎えた。

それでも、この時はまだ、理想を貫き通したことを後悔せず誰も恨むことは無かった。

しかし、死後に”霊長の守護者”として彼に与えられたのは、世界を守護する為の人類の虐殺だった。

何度も繰り返されるソレを拒むことも出来なかった彼は、やがてまざまざと見せつけられた人類の負の側面の前に、信念を摩耗させ理想に絶望してしまった。

故に、彼は”正義の味方”を目指した過去の自分を激しく憎悪しており、八つ当たりにも似た殺意さえも抱いているため、こんな自分になる前に殺してしまおうと目論んで聖杯戦争に参加している。

だが、この世界の衛宮士郎は……………

第三夜・遠坂と言峰

冬木市で古き景観を残す深山町のとある屋敷、その地下に設立された魔術師の工房にて、寶石を用いた魔術的通信機より届けられる情報に目を通してしている男がいた。

男の名は、遠坂時臣。

この聖杯戦争において第一に令呪を授かった魔術師である。

それもそのはず。

遠坂の家系は、御三家と呼ばれ聖杯戦争の形成に関わった経歴を持つ伝統的な名家であるからだ。

さらには、冬木市を管理するセカンドオーナーまでも務めていたりする。

そして、五代目の当主である遠坂時臣もまた、聖杯によって一族の悲願である『根源』への到達を今代でこそ現実にしてみせるため、こうして事前の情報収集に勤しんでいるのだった。

「神童」ことロード・エルメロイは新たな聖遺物を手に入れることなく召喚に臨んだ、か。フン……英霊の召喚において重要なファクターとなる聖遺物を、聖杯戦争の開始を間近に盗まれるとはね。いざという局面においてこのような失態を犯しているようではいかな。そう思わないかい、綺礼？」

時臣はそう言って、自分の傍らで佇む綺礼という名の男へと疑問を投げかけた。

「……………」

沈黙を以て返す彼だが、実際の心中としては「お前が言っな」といったところであった。

遠坂時臣という男こそ、こと準備においては用意周到でありながら、いざ実行に移す段となると足元を見ないという、先程時臣の語ったままの癖を持っているのである。

ちなみに、この癖は恐るべきことに遠坂家の遺伝である。

彼もまた、その例に漏れなかったということだ。

閑話休題。

時臣に疑問を投げかけられた、綺礼という男についても語っておく
としよう。

言峰綺礼。

彼も聖杯に選ばれし者であるが、厳密には魔術師ではない。

それどころか、魔術師の天敵である”聖堂教会”

通称”教

会”に所属していた人間である。

しかし、ある日突然、彼の右手の甲に紋様状に三つの痣が現れたことが、彼の人生の分岐点ターニングポイントとなった。

痣のことを父 言峰璃正に相談した結果、言峰綺礼は遠坂時臣と出会った。

元々、遠坂家は魔術師の一門でありながら古くから教会とも縁故のある家柄であり、遠坂時臣の父と言峰璃正が個人的な友人の間柄であつたことが原因である。

おまけに言峰璃正は、前回の聖杯戦争において中立的な審判の役割を持つ”監督役”を務めていおり、遠坂の管理地である冬木市に自身が経営する教会を設えていることから、その関係が窺い知れる。

そうして綺礼は、遠坂時臣より”聖杯戦争”の存在を知らされ、互いに共闘関係を結ぶに至った。

聖杯戦争における綺礼の役割は遠坂時臣を勝利させるためのサポートであり、そのために諜報活動アサシンに適している暗殺者のサーヴァントを召喚していた。

一応、形としては遠坂時臣に魔術師として師事していた言峰綺礼が自身の令呪の発現と同時に師弟関係に亀裂が生じ、聖杯を奪い合う敵対関係へと変化してしまった というのが筋書きである。

まさか、教会の人間である監督役が魔術師と友好関係で、さらには監督役の息子が全力で魔術師の勝利を支援している、などとは他のマスター達に取っては夢想だにし難いことであろう。普通は、考えも及ばないケースなのである。

……ただ、魔術師でありながら最も魔術師とはかけ離れた思考を持つ、とあるマスターが即座に看破したことは、また別の話である。

そういうわけで、遠坂時臣と言峰綺礼は、表面上敵対関係でありながらも、屋敷の工房に自由な出入りを許可する程には信頼関係を築いていた。

これも、とある理由による綺礼の魔術を学ぶことに対しての貪欲で真摯な態度が、時臣からしてみれば申し分ないものであったからだ。

この信頼関係が一方的なものであるとも知らず、時臣は綺礼に対して揺るぎない信頼を寄せていたのであった。

その後、時臣より借りたある情報が書き留められた書類の束を携えて、綺礼はサーヴァント召喚の準備に取り組み時臣を残して工房を辞し、屋敷の一階へと戻っていた。そして居間へと向かう途中、二人の幼い子供の言い争う声が耳に入ってきた。

思わず好奇心に駆られ、進路方向を修正し喧騒の元へと向かってみると、予想通りの光景が目に入った。

「何をしているんだい？」

綺礼の問いに反応して二人の舌戦はピタリと止み、同時に綺礼の方を振り向いてきた。

「こんにちわ、綺礼。早速ですけど、あなたからもコイツにどうか言ってくれませんか？ 鬱陶しくて適いません」

挨拶もそこそこに、まだ幼い年頃の少女にしては丁寧な言葉遣いで一気に自分の用件をまくし立てたのは、遠坂時臣の娘 遠坂凛である。

将来絶世の美人として成長した姿を想像することが難くない可愛らしい容姿をしている。

その上、父譲りの同年代の少女とは一線を画している風格までも醸し出していた。

「鬱陶しいって……俺はただ荷物を運ぶのを手伝おうとしただけじゃないか」

無然と嘯いているのは、赤銅色の髪の少年であった。

「それが余計なお世話だって言ってるのよ！　こんなスーツケース一つくらいわたし一人で十分なんだから！」

綺礼に語りかけていた丁寧な口調はどこへやら。

少年に対する凜の態度は、年相応の少女のそれであった。

「なんですか。さっきから無理矢理引きずり回しているだけじゃないか。もし廊下に傷でも付いたら良くないぞ。やっぱり凜一人では無理だよ」

「ぐぬぬ……そこまで言うなら、アンター一人でこれを運んでみなさい！　もちろん廊下が傷付いたらいけないから持ち上げて運びなさいよ！」

「はぁ……なんですか」

無理難題をふっかけておいて、何故か勝ち誇ったかのようにまだ薄っぺらい胸を張る凜をみて、呆れた様に少年は溜め息を吐く。そして、さらに邪な気配を感じた少年が隣りを見てみると……

「クツクツク……」

とても元聖職者とは思えないいやらしい笑みをした、腐レ外道神父の姿があった。

少年は、即座に見なかったことにした。

「はぁ………」

「ほら、さつさとやってみなさいよ。今なら宝石一つと心こめた謝罪で許してあげないこともないわよ？」

天使のような笑みで悪魔の様なことを囁いてくる凜は、既に、将来至る守銭奴の片鱗を覗かせていた。

やたら強気でいるのは、普通の子供には到底出来ることではないと高を括っているのだろう。

確かに普通の子供には不可能なことだ。

しかし、ここで凜にも受け継がれている”遠坂遺伝・うっかり”によって凜はあることを失念していた。

少年が、普通の子供でないことを

「
トレース、オン
同調、開始」

「へっ
？」

小さく呪文を唱えた少年は、軽い足取りでスーツケースに近づくと、両手でヒョイと特大なそれを持ち上げた。

「これで良いのか？ 凜」

「な、良いわけないでしょ！ 魔術を使うなんてズルいわよ！？」

「なんでさ。魔術無しなんて言っていないだろ？」

「~~~~っ、うるさーい！ーい！ーい！」

「うおっ……」

痾癢を起こして少年を突き飛ばす凜。

そして、その拍子で少年の持ち上げていたスニーカーが少年の手を放れて廊下の壁にぶつかり、反動で開いてしまい中身をぶちまけてしまった。

「「あっ……」」

中身は衣類だったらしく、辺りには洋服などが散らばってしまった。

「あわわ……は、早く仕舞い直さないと」

慌てて衣服をスニーカーに戻している凜。

そんな彼女を尻目に少年は、衣類の山から無造作に一つを摘みあげた。

「可愛らしいものを履いているんだな、凜」

少年の言葉にバツと反応する凜。

そして、少年の手に有るものを直視する。

自分の下着だった。

「ガ

」

「ガ？」

「ガンドー！ ガンド、ガンド、ガンドオオオオ！」

「なっ、止め、シャレにならないぞ！？」

凜は顔中を怒りか、はたまた羞恥からか、燃える様に赤く染めながら魔力の弾丸を乱発する。

少年は、危なげなくそれを避けていた。

だがしかし、避ければ避けるほど、凜のガンドの連射は激しくなる一方であった。

そして綺礼はその光景を見て、本当に可笑しそうに口元だけで笑っていた。

そんな所に、背後から近づいてくる人の気配を感じた。

とはいえ、この家に残っている人間は遠坂時臣の妻である遠坂葵しかあり得なかった。

「あら。これは一体何があったんですか？ 言峰さん」

「詳しくは私も存じないのですが、どうやら些細な口論から喧嘩に発展してしまっただようです」

「また、いつもの通りですか。ふふっ、相変わらず二人は仲が良い

んですね」

「はあ……………」

この光景を、仲睦まじいと評価できる遠坂葵という女性はかなり珍しい母親なのではないかと、綺礼は思った。

「あら、疑っているんですか？ 凜はあの子と出会ってから本当に感情豊かになりました。桜を失って以来、塞ぎ込みがちだった凜があそこまで明るくなれたのは、間違いなくあの子 言峰さんの息子さんのおかげです」

「……………勿体無いお言葉です」

「とは言え限度がありますね。このままでは言峰くんがケガをしてしまうかもしれません」

「そうですね。そろそろ私が止めさせましょう」

その前に屋敷が崩壊しそうなことをこの女性は心配するべきであろう。

地下から時臣氏の「何事だっ！？」といった声が聞こえてきた様な気もする。

「よろしくお願いしますね。言峰さん」

「……………やれやれ」

軽く呟いた綺礼は次の瞬間、一陣の風と化してガンドの嵐の中へと飛び込んでいった。

多少のイザコザがありながらも、聖杯戦争中の安全確保の為に隣町の実家へと移る凜と葵の見送りまでを終わらせた。車が走り出す直前に、凜から親子ともにあっかんべえをされた私達は、凜の子供らしい悪態に対して揃って苦笑した。

そして現在。

「それで、本当に残るつもりなんだな　　士郎」

誰もいなくなつた遠坂邸の居間にて、向き合つるように座つた我が息子　　士郎へと問いかける。

「当然だろ。そのためにこの三年間、親父と一緒に魔術を習ってきたんだからな」

と、ふてぶてしく答える士郎。

「それよりさ。こつちからも聞かしてもらっけど、親父……何かあったのか？」

「……何故だ？」

「いや、親父が地下から出てきた時、楽しそうな……ていうか楽しみを見つけた様な顔をしていたからな」

「それがどうかしたのか？」

「どうかしてるだろ。親父……アンタがだぜ？」

「………違ういな」

士郎の言う通り、それは確かに異常なことであった。

何故なら、私……言峰綺礼は生まれてこの方喜びも満足も感じたことが無かったのだ。

どんな理念も崇高とは思えず、どんな探求にも快樂などなく、どんな娯楽も安息をもたらさず 故に、言峰綺礼には”目的意識” というものが無い。

そんな感性が世間一般の価値観と乖離しているという人格の欠落に私が苦しんできたことを……師にも、父にも、愛した女性にも、理解して貰えることなく生きてきた。

しかし、ここに至って新たな自分の同類かもしれない人間を見つけたのだ。

「実はな、この聖杯戦争に私達と同類で、尚且つ”答え”を得ているであろう人間が参加するかもしれないのだ」

そんな私の言葉に士郎は「へえ」と軽く返すだけだった。

そう。我が息子たる士郎こそ、己の苦しみを初めて理解し、己と同じ欠陥を持ち合わせた人間だった。

違いがあるとすれば、士郎は既に絶対唯一の”答え”を得ているということであろう。

しかし残念なことに、士郎の”答え”は綺礼の”答え”とは成り得なかった。

それでも、自分と同類の人間が”答え”とは得たことは綺礼に希望を与えたてくれた。

そして、新たな”答え”の可能性である衛宮切継もまた、綺礼にとっての新たな希望であり聖杯戦争へと臨む意義と成り得た。

「良かったじゃん、親父。これで一緒に心底から聖杯戦争を楽しめるな」

「……お前が”戦い”にのみ意味を見出す『剣』であることは知っているが……無茶はするな。まだお前は幼い」

「大丈夫さ。英霊って奴らは、俺の魔術にとって最高の力モだよ」

不敵に笑いながら、士郎はそう言った。

彼の両手には、いつの間にか剣が握られていた。

第三夜・遠坂と言峰・（後書き）

凜が魔術刻印も無しにガンドを連発することに違和感ある人は、所詮ギヤグパートということ流して下さい。

そんなことよりこの小説の独自設定を晒しておきます。

? 士郎と綺礼は実の親子

? カレンと士郎は双子

? 言峰の妻は生存

こんな所でしょうか。

言峰士郎は実子です。それに合わせて性格も上手く変えていけたらなと思います。

ちなみに士郎君は所詮まだ子供ですから戦闘はそれほど期待出来ないかもれません。

批評・感想お待ちしています。

第四夜・マトリクス？ -

名前：言峰士郎

誕生日

身長：133cm / 体重：35kg

イメージカラー：赤銅・黒

特技：綺礼の心を読む

属性：火・剣

起源：剣・

好きなもの：戦闘

苦手なもの：平和

天敵：遠坂凜・言峰カレン

【略歴】

言峰綺礼とイタリア人の女性との間にカレンの双子の兄として生まれた。母親が病弱のためカレン一人で手一杯であり、父親が綺礼であったため主に璃正の世話を受けて幼生時を過ごす。その間、士郎は殆ど泣くことも笑うことも無く、それ以外の感情の発露も一切なかった。

そして三年の月日が経った頃、令呪を発現させた綺礼が璃正を頼った時、物心ついてから初めての父親との対面を果たし、綺礼が悩んでいることを内容まで初見において看破した。

その後、綺礼と共に魔術という新たな価値観に何かを見いだすという目的を同じくして時臣に師事することとなる。初めはまだ士郎が幼かったため時臣は士郎を弟子にすることを渋っていたが、士郎の属

性が火であり綺礼と違って明らかに魔術の修得が上手くいかなかったも諦めることのない姿勢が時臣に昔の彼自身を想起させたため、正式に弟子として認められた。

さらに魔術にさえも何も見いだせなかった綺礼に対して、士郎は魔術を学ぶことに初めて味わう何らかの感触を得ていた。そして魔術を学び始めて一年後、ある事件により起源が覚醒。それによって眠っていた魔術特性が目覚め、生まれて初めて”価値あるもの”を見いだす。

その後は性格もある程度改善されていき、暴力的ではあるものの年相応な子供っぽい一面もみせるようになっていった。

未だに昔の自分と同じであり、それを悩みとして抱えている綺礼のことを父親としても元同類としても気にかけており、聖杯戦争において綺礼が何かを見いだせるように全力でサポートすることを誓っている。(ただし半分は自分の戦いたいという欲求のため)

【人物】

起源覚醒以前は、あらゆることが無価値にしか感じられなかったため、喜怒哀楽といった全ての感情を表すことはなかった。人間として何かが一般的な人々とズレていた。

起源覚醒以後は、”戦うこと”に価値を見いだしそれを通じることが喜びなどを感じ取っていき、少しばかりながらも性格と呼べるようなものが形成された。

士郎は価値観の方向性が他人よりズレていたが故に、目的意識を持ってないでいた。そのため価値観が他人とは真逆である綺礼とは、士郎自身が思っている程同じという訳ではない。このことが後に、彼らの関係に多大な影響を及ぼしていくことになる。

【能力】

魔術特性は『剣』。属性は『剣』と『火』の二重属性。起源は『剣』と『火』の複合属性。

得意とする魔術の順列は、投影＞解析（構造把握）＞強化＞変化＞発火。解析（構造把握）に関しては、派生する解錠と修復も極められている。発火に関しては本一冊を数秒で燃やしきる程度。元々士郎は『剣』に特化しており、『火』はオマケみたいなもの。

起源覚醒者であるため、身体能力は年齢に見合わないでずば抜けており、闘うことに特化している。とはいえまだまだ子供の身体なのでせいぜい多少戦闘の心得のある成人男性程度のもの。だが『剣』の起源により肉体は鋼の如く硬化して、士郎の打撃には斬撃属性が付加される。

第五夜・帰郷

冬木市は冬の時期が多少長いことが由来となって名付けられた街である。だがそんな名前とは裏腹にわりと温暖な気候が冬の季節の間も保たれるため、厳しい寒冷期に襲われることは稀である。

そんな程良く身にしみるような北風を吹かす冬木の街を歩く、異色の三人組の姿があった。

「全く。この冬木という街は……いや、日本そのものが気に入らんな。極島の島国の分際で我々西欧に張り合おうと、風土を無視してただ見た目ばかりを文明国の如く演出しようど……国の誇りが感じられんわ」

と、嘯いているのは九代の伝統を誇る名門出のエリート魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトである。名家に生まれ、まさに貴族然と育ってきたケイネスにとってはこの街の有様は度し難いものであつたらしい。

「ちよつとケイネス。ここはフェイカーの故郷なのよ。少しは言葉を選んであげられないの？」

そんなケイネスに非難めいた口調で注意を促す美しい容貌の女性の名は、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。ケイネスの許嫁パートナーである。

「いや……それはだな、ソラウ」

ソラウの言葉にたじろぐケイネス。彼にとってソラウは許嫁の関

係ではあるが、幼なじみで一目惚れした相手でもある。

そのため、エリートとしてプライドの高いケイネスでもソラウには頭が上がらないのであった。

「なに、私にそんな気を使うことはないぞ。私としては、こうして街を実体で歩かせてもらえるだけで満足だ」

ケイネスらの後ろに追従していた長躯の男 フェイカーの
サーヴァントとして未来より（・・・）現世に召喚された英霊で
ある男が、背後より二人の会話へ割って入る。

フェイカーは、彼の言うとおり霊体化せずに実体を持って行動していた。魔力消費や敵の魔術師の監視に引っかかるリスクを考慮すると、これは一見無駄な行為である。

「フン……勘違いするなよ。これは貴様の記憶が少しでも回復するようにと考えてのことだ。貴様の郷愁を慮ったわけではない」

眉を寄せて辛辣に言い放つケイネス。

そう。フェイカーは未来から召喚された英霊 しかも聖杯

戦争の行われる地の出身でそう遠くない近未来から召喚されたということであつたため、ケイネスはフェイカーに未来の情報ということ戦争に於いて圧倒的なアドバンテージを誇るファクターを要求した。

だが、フェイカーは記憶のほとんどを無くしてしまっていた。故に無くした記憶を復活させる要因として何が最も効果的かを考えた結果、フェイカーにはできるだけ実体化した状態で行動させ故郷に直接触れさせることとなつたのだつた。

「これで少しも記憶が戻らない様なら承知せんぞ」

「クツ。善処させていただこう、マスター」

ケイネスの脅し文句にもフェイカーはまったく動ずることなく、やはり皮肉げに笑ってみせていた。

そうして軽い口論を果たしている内に、ケイネスら一行は此度の戦争において拠点とする建物である冬木ハイアットホテルへと到着した。

現在フェイカーはホテルの屋上の縁に佇み、眼下に広がる冬木の街並みを俯瞰していた。これもまたケイネスの指示によるものである。敵のマスター達からの攻撃などがないかを監視し、また記憶の回復となることも兼ねていた。

ケイネスとソラウの二人は、このホテルの丸ごと借り切った最上階フロアを魔術工房へと作り替える作業に取り組んでいた。魔術師

として一流の腕を持つ彼らの前では、一応魔術を習得しているとはいえ総合的には三流の腕前のフェイカーでは足手まといだと悟ったことも一つの理由ではある。

そういう訳で屋上より監視と視察を続けるフェイカーではあったが、さすがに入国初日から拠点がバレるようなハマをケイネスは犯していないため特に害的要因は見当たらず、記憶の方に関しても収穫は無かった。

フェイカーの勘では新都ではなく深山町の方が自身の記憶と深く関わっている気がしないでもないが、さすがに監視をほったらかして拠点を離れる訳にはいかなかった。

それにフェイカーは記憶を取り戻すことに対して、さほど重要性を感じていなかった。

聖杯戦争に参加する目的と昔の自分の名前の記憶さえ残っていれば、己の復讐^{のそみ}を叶えるには十分だったからだ。

そんな、心の内に暗い闘志を燦らせていた時だった。

不意に、脳を激しく揺さぶられた様な衝撃にフェイカーは襲われた。

その原因は地上よりこちらを見上げる一人の男。

地上と三十二階のホテルの屋上との高度差に、一般人には見咎められないように己の周囲に張り巡らした結界があるにも関わらず視線がぶつかり合った相手。黄金の髪と紅蓮の双眸を持つ人間

否、英霊……サーヴァント。

かつてエミヤシロウの戦いにおいて立ちはだかった最強の敵、英雄王ギルガメッシュに相違なかった。

そして、もしもの話である。

フェイカーがかの英雄王に視線が釘付けになることなくほんの僅かに横へと視線をずらしていたならば。

そこに居るはずのない。居てはならない存在に、気づくことが出来たで有ろう。

己の知る自分と遙かに乖離した別人の存在に

その日、言峰士郎は自分の魔術の師匠の召喚したサーヴァントであるギルガメツシュから冬木の街を案内するように依頼ではなく命令されたため、ギルガメツシュと共に2人で冬木の街へと出向いていた。

そして深山町をあらかた周り新都へと進出したところ、突然案内していたギルガメツシュが足を止めて空を見上げたまま動かなくなってしまった。

「どうかしたのか？」

士郎は突然歩みを止めたギルガメツシュへ問いかける。

「何処の馬の骨とも知れん輩が、この我を見下すとはな。……………消すか」

ギルガメツシュは見上げた姿勢のまま、士郎の問いに答えた

わけではなく、ただ独り言を呟いた。僅かながら殺気を滲ませている。

「こんな街中で戦り始めるなよ？」

「ほう。この我オレに意見するか、雑種」

上空に固定していた視線を外し、窘める言葉を発した士郎へと紅き双眸を向ける。

圧倒的威圧感を醸し出しているギルガメッシュを前にして、だが士郎は怯むことなく視線を返していた。

「今夜、戦闘を行う予定なんだろう？ こんな所で早まるなよ」

「ハンツ、あれを戦闘と称するだと？ 大概にしるよ雑種。あんなものは下手な三文芝居にも劣るわ。そもそも我オレに戦いなどない。あるのはただの掃討、処理、殲滅……この我オレに戦闘など成立するはずがなかるう」

傲岸不遜

そんな言葉を体現したような物言いである。

だがギルガメッシュはその傲慢な態度に値するだけの能力をもっている。彼が今回の聖杯戦争において最強のサーヴァントであろうことは、勿論士郎も理解していた。

そんなギルガメッシュの殺気の混じった眼光に曝されて、尚も士郎は自分の命の危険性を鑑みたりはしなかった。

ギルガメッシュの気まぐれ一つであっさり殺されてしまうだろうにも関わらずにだ。

その決してぶれることのない士郎の視線の前に、ギルガメッシュは興味が失せたと言わんばかりに嘆息した。

「チツ……貴様の父親と違って面白みのない奴だ」

舌打ちと共に吐き捨てるように士郎への侮蔑を口にする。それは士郎にとって聞き逃せない内容であった。

「……俺の親父がなんだって？」

「貴様とて気づいているだろう。綺礼の歪さには」

「歪……？」

ギルガメッシュの語る内容に疑問を覚える士郎。

確かに自分の父親である綺礼は一切のことに目的を持ってず、万事に対して何も感じる事が出来ない人として異端である。

だがそれは歪というよりも欠落であると、士郎も綺礼も考えていたのだ。

「ククツ、貴様なら分かるであろう？ 綺礼は愉悦や快樂といった感情を持っていないのではない。ただ”識らない”だけだ。それがあまりにも平凡な感性とやらからかけ離れている故にな」

まるで言峰綺礼が今日までの人生を費やして捜し求めた答えの全てを見透かしているかのようにギルガメッシュは語る。

「……親父の求めるものが分かっているのか？」

「当然であろう。この我^{オレ}は王として貴様ら有象無象の雑種どもを見^{オレ}てきたのだぞ？ 我の眼力は並みではないわ」

「なら」

「言っておくが、我^{オレ}から綺礼にソレを教えるつもりはない」

「……なんでさ」

「面白くないではないか」

ニヤリと口元を妖しく歪めながらギルガメッシュは断言した。

「綺礼が己の愉悦を知ろうと苦悩する様、薄々己の歪みに気づいていながらも認めることが出来ずに苦悩する様 どれもが甘美で愉快ではないか」

他人の不幸は蜜の味。

他人の幸福は砂の味。

そんな人非人の道を地で行くのが、ギルガメッシュという英雄の中の英雄であった。

「……………」

「クク、そう睨むな。それよりもそろそろ時臣が五月蠅く言っていた時間だ。我^{オレ}の庭の案内の続きははまた今度だ」

そう言っつて踵を返し深山町の方へと戻って行くギルガメッシュ。そんな彼の後を、さつきまでとは逆の立場で、少し離れて黙ってついで行く土郎であった。

唐突な記憶の復活による混乱からフェイカーが立ち直った頃には、既に敵のサーヴァントの姿は消失していた。視野範囲の限界までをくまなく探してみたものの、忘れようのない特徴的な姿を二度と捉えることは無かった。

仕方がないので引き続き監視を続けながらも、フェイカーの思考は先ほどのサーヴァントのことから離れなかった。

「英雄王

ギルガメッシュ」

忘我のままに漏れ出たサーヴァントの真名。

視線が僅かに重なっただけながらも、しっかりとその名を思い出すことが出来たのは、エミヤシロウにとってギルガメッシュがそれだけ強烈な存在であったからであろう。

なにせ、彼女が一度敗北を認めた相手だ。フェイカーの中に残っ

ていた数少ない記憶の中で、憧憬と最愛の存在である彼女を唯一打ち負かした相手というのは、フェイカーにとっては懸念すべき事項だ。

何故なら、この戦いでギルガメッシュと戦わなければならないのはフェイカーである。

(私は……勝てるのか?)

あらゆる宝具の原典にランクEXの対界宝具。

およそ考え得る限りこれほど最強の言葉に相応しいサーヴァントは他にないだろう。あらゆる宝具の原典を持つということは、つまりあらゆるサーヴァントの弱点を突くことが可能ということと同義である。

そのため、全てのサーヴァントにとって鬼門となりうるのがギルガメッシュというサーヴァントだ。

だがフェイカーは別だ。

彼にのみ許されたある魔術は、逆にギルガメッシュにとって鬼門となりうる力。

ネックである対界宝具にさえ気をつければ、或いは

『フェイカー。聞こえているか?』

思考に沈んでいたフェイカーを引き上げたのはケイネスからの念話だった。

『今後の方針について話す。降りてこい』

一方的に用件を告げて念話を切ったケイネスに、マスターらしいと思いつつもフェイカーは霊体化してホテルの中へと入って行った。

「アサシンが脱落した」

開口一番に放たれたケイネスの言葉に、さしものフェイカーも驚嘆を禁じ得なかった。

「……本当かね？ マスター」

訝しげにケイネスへ問いかけるフェイカー。

「事実だ。日本に来てすぐ遠坂邸に放っておいた使い魔で確認した」

「そうか……」

フェイカーは突発的な展開に押し黙ってしまふ。

「ちなみに遠坂のサーヴァントの姿は確認できたかね？」

「無論だ。黄金の光を発するサーヴァントで武器の投擲による攻撃をしていた。いや、射出か？」

「ともかくアーチャーである可能性は高いな」

「……なんだと？」

黄金のサーヴァントがギルガメッシュであることは間違いないと確信するフェイカー。しかし、ケイネスの言ったある事柄に違和感を感じていた。

（遠坂邸にギルガメッシュ。つまり、ギルガメッシュのマスターは遠坂の魔術師……？）

「ん？ なにか気になることでもあったか？ フェイカー」

「いや………呆気ないものだと思っていただけだ」

確かな違和感がありながらも、その正体を察せなかったためケイネスの問いをフェイカーは誤魔化した。

「さて、本題に入ろうか。アサシンが消えた今、我々は闇に潜み奇襲を仕掛けるしか能のない下劣な輩に脅える必要がなくなった。よってこちらから積極的に狩りに行くことにする」

「……………」

フェイカーは違和感の件だけでなく、アサシンの脱落にも腑に落ちない思いを感じていた。

始まりの御三家とあるうものがアサシン相手とはいえ中枢部まで侵入を許すことはおかしい。

故にフェイカーは、今回のアサシン脱落の件に関して裏があるのではないかと勘ぐっていた。

「何を黙っているフェイカー？ 今更怖じ気づいたとは言うのではないだろうな」

「…………フ、愚問だなマスター。私は敵サーヴァントの悉くを蹴散らしてみせる所存さ。心配は要らない」

余裕あり気な風を装うフェイカー。

だが内心では奇妙な予感めいたものがあつた。

そして、明日の夜。

予感は的中し、フェイカーは運命の再会を果たす。

第五夜・帰郷・（後書き）

感想・批評お待ちしております

第六夜・運命の邂逅・（前書き）

プロローグの続き

フェイカーVSセイバーです。

拙い戦闘シーンですがよろしくお願ひします。

第六夜・運命の邂逅

海浜公園に隣接する形で広がる倉庫街　　人通りも皆無で
静寂に包まれていながらも、徐々に重苦しい空気に支配されようとしていた。

原因は対峙する二人の人物にある。

直接的な原因は、ダークスーツを身に纏う男装の少女だ。その華奢な肢体から儂げな少年にも見えないこともない彼女だが、発する闘気は歴戦の猛者のそれであり、倉庫街に広がる重圧感は彼女の闘気　　いや、怒気とも言えるものによるのだった。

そして間接的な原因は、少女と対峙する長躯の男　　フェイカーだ。彼の挑発が少女の怒りを買ったのは誰の目にも明らかであつたからだ。しかし彼は少女の発する怒りなどどこ吹く風といった様で、目前に立ちはだかる少女を観察していた。

(ふむ、見事なまでに精錬された闘気。まさに騎士そのものといったところか……………さすがだな)

「私たちをあからさまに誘っておきながら、今更安い挑発とはどういふ了見だ？　それとも、単なる侮辱だと言つならば斬つて捨てるぞ！！」

そんなフェイカーの様子が気に障つたのか、静謐な怒りをこめて

叫ぶセイバー。

だがフェイカーは変わらず余裕をみせ、皮肉げに笑ってもみせた。

「クク、すまなかつたな。まさか君のような少年まで此度の聖杯戦争に招かれていたのが意外だな。ついからかいたくなっただけだよ」

弁明するフェイカーであつたが、セイバーはその言葉を聞いて逆に怒気を増大させていた。

そして、魔力を放出させ光に包まれたかと思うと、次に姿を現したのは蒼きドレスと白銀の甲冑を合わせた戦闘衣に身を包むセイバーであつた。

「
」

フェイカーは、ただただその姿に魅入り息を呑む。

磨耗しきつた彼が、それでも尚、脳裏に刻み込んで色褪せることなく残っていた姿がそこに在ったからだ。

声を漏らしそうになるのを、「セイバー」と呼びたくなるのをグツと堪えるフェイカー。

どうにか平静を保ちながら、精一杯の笑みを浮かべる。

「ククツ、まさか少女だったとは……………とんだ無礼をはたらいてしまったな」

「気にするな。貴様は即座に斬り伏せる。最期にクラスだけは聞いておこう」

「ああ」

(どうやら英雄にまでなつても、彼女にとってはとるに足りない存在としか感じられないのか)

「私はランサーさ」

そう言いながらも、彼が両手に顕現させ握り締めたのは黒と白の双剣だった。

「……………何のつもりだ？」

ランサーだと言いながら双剣を持つフェイカーに、セイバーは憚然とした表情で問いかけた。

「なに。君を倒すには剣これで十分ということさ　　セイバー」

「よく言った……………ランサアアアアア!!!」

セイバーが怒号と共にフェイカーへと突進し、手に握る不可視の聖剣を唐竹割りに振り下ろす。少女の華奢な肢体より繰り出される剣撃でありながら、セイバーの『魔力放出：A』のスキルによって一撃必殺の剛剣と化していた。

それを迎え撃つフェイカーは、剣撃を正面から受けようとせず、弧を描くしなやかな剣技を以て、威力を殺し、衝撃を受け流す。

果たしてセイバーの剛剣はフェイカーの柔剣の前に防がれた。

だがこれは、所詮ただの一撃に過ぎない。

フェイカーがセイバーの一撃を防いで間を置くことなく二撃目がフェイカーの身体を切り裂かんと振るわれ、フェイカーの流麗なる剣技の前に再びその身体に届くことなく終わる。

しかしその剣の応酬が数合、数十合と繰り返されると二人の間に明確な差が表れてきた。

元々臂力で劣るフェイカーが、徐々にセイバーの高速の剛剣を捌ききれなくなっていた。そして捌き損ねた剣撃の威力がフェイカーの身体を伝わり動きを鈍くし、防御が崩れてしまう。

そしてとうとう、セイバーが完璧に防御が崩れて僅かながらも無防備となった箇所を目ざとく見出した。

セイバーがそれを見逃す筈がなく、渾身の袈裟斬りをフェイカーへと繰り出す。

(獲った ！！)

確信を持って剣を振るセイバー！

だが彼女の並外れた直感は全く別のヴィジョンを見せていた。

「なっ！！！」

カウンターを避けるようにして後方へと跳び、距離をとって体勢を立て直した。

フェイカーはセイバーを追撃せず、残った黒刀を片手に握り締め、たまま不動の構えで佇んでいる。

両者の激突。

結果は、一見すると武器を破壊されたフェイカーが劣勢でセイバーが優勢に映る。

されど優勢である筈のセイバーの心中に余裕はなかった。

理由は言わずもがな。セイバーのサーヴァントとして最強の一角に数えられるアーサー・ペンドラゴンと、剣をもって互角に渡り合ったのだ。これが驚愕に値しないわけがない。

だが、セイバーが心中で思っているのは驚愕だけでなく賞賛

そう、賞賛だ。

直接フェイカーと打ち合わせたセイバーには彼の剣がどういうものであるかを感じ取れていた。

それを一言で表すならば、弱者の剣。

力を持たず、才能を持たない弱者が、それでも己より遥か強大な敵と戦うため、愚直なまでにひたすら鍛え上げた剣。

二流の極みとも言えるそれは、剣の英霊であるセイバーを以てしても素晴らしいと賞賛せざるを得ないものであった。

「……見事な剣術だ」

故にこれはセイバーの心底より溢れ出た、紛れもない本音だ。

しかしセイバーは、「だがそれでも」と言葉を続ける。

「貴方の剣では私を打ち倒すことは適わない」

セイバーの指摘は決して傲りなどではない。

現にセイバーは、フェイカーの剣術のカラクリを見破っていた。

フェイカーの剣術の基本は防御にある。

双剣により弧を描くような流麗な剣で鉄壁の防御を敷きながらも、その中にワザと隙を作り出す。そしてその隙を突いてきた相手の攻撃を防ぎ、カウンターを喰らわせる。相手が強者であればあるほど、些細な隙をも見逃さないことを利用した、一歩間違えれば己の死に繋がる命懸けの技だ。

だがそれも、セイバーには通用しない。

彼女の保有する『直感：A』のスキルは未来予知にも匹敵する効果がある。このスキルを以てすればフェイカーの作り出す隙の真贋を見極めることは容易であるからだ。

「……………」

フェイカーはセイバーに言葉を返すことなく沈黙を貫き、剣の切っ先をセイバーへと向けて構えた。

セイバーもまた、己の言葉が無粋であったと悟り、不可視の剣を

構え直す。

そして次の剣戟で決着を着けることを誓い、再度の突撃を試みようとした。

だが、先手を打ったのはフェイカーだった。

片割れとなってしまった黒刀を、セイバーへと投擲した。

「な ツ!？」

想定外の攻撃方法に不意を突かれたセイバーであったが、直感のままに横っ飛びして空を切り裂き迫る黒刀を回避する。

だがセイバーは安堵を覚える間もなかった。フェイカーが間髪容れずにセイバーへと肉迫し、そこに有るはずのない、右手に握り締められた白刀を振りかざしていたからだ。

「……………ツ!！」

間一髪。脳天目掛けて振り下ろされた白刀を、セイバーは不可視の剣で防いだ。

しかしフェイカーの攻撃は止まらない。短刀の軽量さを生かしてセイバーが攻撃へ転じられないように息も吐かせない連撃を繰り出す。

セイバーもやられてばかりではない。いずれ来るであろう反撃の機を見据えて、伯仲の剣戟を懸命に維持する。

それがフェイカーの狙い通りとも知らずに。

セイバーが奏でられる剣はがねと剣はがねの旋律の中、何かが空を切り裂き飛来する音を聞き取れたのは偶然の賜物であった。

その音を背後から聞き取ったセイバーは、己の身に迫る危機を瞬時に理解した。そして目前の障害と背後の脅威を同時に打開する策を導き出し、実行する。

「ハアアアアッ!!!」

渾身の魔力を込め、周囲一帯を薙払う。

セイバーの繰り出した回転斬りは、飛来する何か 信じられないことに先程投擲した黒刀である とフェイカーの白刀を同時に弾き飛ばし、ピンチより一転してセイバーに必殺の一撃を叩き込むチャンスをもたらした。それを逃すことなく、”今度こそは”と思うセイバー。

しかし

「トレース、
投影、開始」

フェイカーが紡いだ一言の呪文によって、再び彼の両手に双剣が握られていた。

セイバーの回転斬りの勢いを利用した一撃は交差された双剣によって受け止められ、フェイカーが威力を逃がすようにして後ろへ跳ぶことで防がれた。セイバーはまたしても必殺の機を逃すこととなった。

ステータスで圧倒していながらもフェイカーの守りの堅さ故に、中々一撃見舞うことが出来ないセイバーは、フェイカーを見くびって戦いを挑んだことに臍を噛んでいた。

自分が今まで培ってきた技術をぶつけているフェイカーもまた、己の憧れの相手の強大さを痛感していた。

理想を追い求め、弛まぬ努力によって鍛え上げてきた武技の悉くが、彼女は打ち破る。このまま剣で挑んでも自身の敗北は時間の問題であるかと考えていた。

と、両者共に苦い思いをしていた時だった。

『ランサー。いつまで手間を掛けるつもりだ』

倉庫街に何処からともなく冷淡な声が響く。

フェイカーは元より、目の前の男をランサーと呼んだ謎の声が彼のマスターであることをセイバーとアイリスフィールは悟る。

『早々にセイバーを始末しろ。宝具の開帳も許す。貴様の言葉が空言でないことを証明しろ』

姿を見せないマスターの言葉に、セイバーは緊張を高めていた。まるでセイバーが大した脅威ではないかのようなその言葉は、目の前のサーヴァントの宝具の威力に基づく自信の表れだろうか、とセイバーは勘ぐる。

「フ、私のマスターは気が短くてな。悪いが今宵の闘争は次の一撃で終わらせてもらうぞ」

フェイカーはセイバーを挑発した時と大差ない口調のまま、そう告げると、両手の剣を消滅させて新たな武器を顕現させる。

「！それは！！」

フェイカーが両手で構える武器を見て、思わず叫びを上げるセイバー。なにしろその武器はあまりにも特徴的な形をしていて、それを見るだけで敵サーヴァントの真名を彷彿させた。

槍のような先端に刃をつけた棒に、さらに三日月状の形をした月牙と称される刃が両側面に取り付けられた武器。中国の英雄たちが好んで使用していたとされる、方天戟から派生して作られし武器

”方天画戟”。

三国志において最強の存在として君臨する”呂奉先”の得物である。

「いくぞ」

フェイカーの一言と共に、方天画戟に膨大な魔力が収束していく。それはおよそAランクに相当するであろう威力を想像させる程のも

のだった。

なるほど。Aランクに相当する宝具を持つならばあの自信も分からないものではない。

だがしかし、上には上がいるのが世の理である。

臆することなく宝具を構えるフェイカーを見据えるセイバー。何を隠そうとも彼女の宝具こそはA++ランクを誇る最強の聖剣”エクスカリバー”である。

故に彼女は宝具同士のぶつかり合いにおいては絶対の自信を持っていた。

「アイリスフィール、下がってください。こちらも宝具で迎撃します」

「分かったわ」

マスターを巻き込む可能性を排したセイバーは、風の鞘により姿を隠していた聖剣の封印を解く。巻き上がる暴風の中から、荘厳な光を放つ伝説の聖剣が姿を表した。

光輝く黄金の剣の前に、アイリスフィールも姿を見せないケイネスもただ呆然と見惚れていた。

だがフェイカーだけは、まるで懐かしむように目を眇めて見つめるだけで、その輝きを前にしても一切の動揺は見られなかった。

「
”軍神”
」

「
”約束された”
」

そして、互いの魔力の高まりが絶頂へと到達し、今まさに真の必殺たる一撃が解き放たれようとしていた。

されど、両者の宝具のぶつかり合いは妨げられることとなる。

突如、倉庫街に轟き渡った雷鳴の響きによって。

第六夜・運命の邂逅 - (後書き)

後書き

エミヤが使った方天画戟はs nでギル様が使った方ではなくe xでモノホンの呂布が使っていた方です。

感想・批評お待ちしております

第七夜 - 死闘、激烈 -

私が投影した方天画戟。

これの五つの形態による攻撃を自在に繰り出す絶技。

”ゴッドフォース軍神五兵”。

彼女の持つ最強の聖剣による極光の一撃。

”エクスカリバー約束された勝利の剣”。

今まさに真の力が解き放たれ、ぶつかり合おうとしていた。

元より決めていたとはいえ、正直分の悪い勝負だと思っていたこの宝具の撃ち合いは、図らずも中断を余儀なくされてしまった。

原因は明白だ。

私とセイバーの方へと紫雷を足場として踏みしめながら空を駆けて来る二頭の牡牛に牽かれた古風の戦車の仕業である。牡牛が駆け度に進る雷に込められた魔力の密度から、間違いなくサーヴァントの宝具だろう。

そして戦車を宝具に持つクラスとなると、十中八九ライダーのサーヴァントに相違ない。

私は方天画戟を消して、明らかに私たちの戦闘への介入を目的に迫り来る戦車を睨み据える。

あれほどの雷を纏う英霊となれば、おそらくは雷神に類いする存在。さらに牡牛に縁のある雷神となると、思い至るのは主神ゼウス。

またはその眷属たる英霊であることは間違いない。

『あれは……まさか……』

念話を通じてマスターの呆然とした呟きが耳に入る。

『心当たりがあるのか、マスター』

『当然だ！ あれは元々は私が召喚する筈だったサーヴァント……！』

ああ、なるほど。そういえばソラウさんが言っていたな。

マスターは召喚の直前で聖遺物を盗まれてしまい、仕方なく触媒なしで召喚を試み、私を召喚した、と。

……この話を聞いた時、何故か懐かしさと共に”うつか凜”という言葉が記憶に蘇ったが、あれは何であったのだろうか？

などと他愛のないことを思考している内に、宝具と思われる戦車は私とセイバーの中間地点へと、戦闘を阻むようにして地上へと降り立った。

そして御者台より屈強な肉体をした巨漢が姿を現した。

見るだけで感じ取れる凄まじい威圧感。どこかセイバーに通ずるものを感じることから、おそらくは高ランクの『カリスマ』スキルを持っているのだろう。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

自らを”王”であると称する目前の英霊は、前の雷鳴に匹敵する大音声をもって私とセイバーに戦闘の中断を命じた。

どうやら介入の目的は、戦闘に混ざるのではなく戦闘を止めることにあつたようだ。

だがその目的の意図が、巨漢の英霊の考えていることが読めない。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

ふむ。やはりライダーのサーヴァントだったか……。つて、待て待て。一体何のつもりだこいつは。突然戦闘に割って入ってきたと思つたら自己紹介だと……？

「何を　　考えてやがりますかこの馬ッ鹿はあああ！」

御者台に一緒に乗っていたライダーのマスターらしき人物が抗議の声を上げていた。この奇行はサーヴァントの暴走でありマスターの意思ではないようだな。

だがライダーのマスターはデコピンで沈められていた。哀れだ。そしてライダーは何事もなかったかのように私とセイバーへ視線を向けてきた。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。

うぬら各々が聖杯に何を期するのかは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してなお、まだ重いものであるかどうか」

「貴様　　何が言いたい」

同感だな。この問いだけでは、まだライダーの意図が判然としない。まさか本当にこれだけの為に介入したわけではないだろう。セイバーの剣呑な態度が良い証拠だ。彼女はライダーの問いを受けて何か不穏なものを感じ取ったのだろう。

「うむ、噛み砕いて言うとな。ひとつ我が軍門に降り、余に聖杯を譲る気はないか？ さすれば余は貴様ら朋友として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

……呆れてものも言えんとはこのことだな。

現れて早々に真名を名乗り、挙げ句の果てには戦わずして降伏を促してくるとはな……。いささか度の過ぎた行為ではないだろうか。

「……私とランサーの戦いを邪魔立てしといて口にするのがそのよ
うな戯言とはな。不愉快きわまりないぞ、ライダー。」

そもそも、騎士王としてブリテン国を預かった身である私が、臣下に降るなど断じて有り得ないことだ」

……待てセイバー。君まで易々と真名を曝してしまうのか。

「ほう？ ブリテンの騎士王とな？」

こりゃ驚いた。彼のアーサー王が、こんな小娘だったとは」

「その小娘の一太刀を浴びてみるか？ 征服王」

セイバーが私に浴びせていたものに匹敵する闘気を放ちつつ、剣を構えて切っ先を真っ直ぐにライダーへ向けている。

「むう……。ならば、貴様はどうだ？ ランサー」

ライダーの問いの矛先が、セイバーより私へと移される。

正直、あまりにも突拍子もない話しに、溜息の一つでも吐きたい心持ちではあるが、取り敢えず私の意志も示しておこう。

「愚問だ。世界征服は元より、聖杯自体にも興味はない私だが……マスターの意向を無視してまで君に仕えることに、残念ながらメリツトが見いだせないな」

「聖杯に興味がない？　なら貴様は何のために召喚に応じたのだ？」

「クツ、そこまで話す義理はない」

ライダーの追求を一蹴してやると、巨軀の男は眉をひそめて「交渉決裂かあ」などとぼやいている。

そこへ、ライダーのデコピンにより沈黙していたマスターが復活し、ライダーへと突っかかっていた。

まるで漫才のような会話を繰り広げる両者を視界に収めつつ、念話を使ってマスターにこの状況をどう対処するか、意見を求める。

『さて、当初の目的は達成した。予想以上の大物が二匹も釣れた上に、双方とも真名が判明した。初戦の収穫としては十分でないかね？』

『……………』

返事がない。

「マスター？　聞いているのか？」

再三の呼びかけにもマスターの応答はなかった。
もしか、マスターの身に何かあったのだろうか？ と、思い始め
たころだった。

やっとマスター側から反応があった……のだが。

『……………フ……………フフツ……………』

聞こえてきたのは、憎悪のような強い負の感情を堪えているかの
ような不気味な笑い声だった。

そして念話から倉庫街に響き渡りつつ正体が判別出来ないように
幻覚を交えた拡声に切り替え、堪えていた憎悪をライダーのマスタ
ーへとぶちまけるように語り出した。

その内容は自分のマスターながら、悪辣で非情なものであった。
あまりよろしい性格ではないだろうとは思ってはいたが、その評価
は下方修正する必要があるがそうだ。まあ、一応言っていることは正
論ではあるのだが。

そうしてライダーのマスターへの鬱憤を晴らしたケイネスだった
が、ライダーからの反逆を喰らうことになる。

戦場に姿を現す度胸のない臆病者。と、逆に罵りを受けてしまい、
閉口せざるをえなくなった。

さらにライダーは、誰にともなく夜空に向けて大音声を張り上げ
た。

「おいこら！ 他にもおるだろうが。闇夜に紛れて覗き見をしておる連中は！」

ライダーの再びの奇行に、その意図が掴めないセイバーは怪訝な表情をする。

だが私は、ライダーの行動の意図を理解してしまった。故に私は冷ややかな戦慄を覚えた。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ ここに集うが良い。なおも顔見せを怖るような臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れるものと知れ！」

ライダーの言葉は、目的はどうあれ私とセイバーの戦闘に惹かれたサーヴァント達を、挑発を持って呼び出そうとして放たれたものだ。これが、先ほど視認した三人の暗殺者にだけ向けたものならば良かった。

だが、未だ姿を見せていない、聖杯戦争に参加する全サーヴァントへ向けたものなら話しは別だ。

理性のないバーサーカーや後衛戦闘が基本のキャスターは、それでもライダーの挑発に簡単には乗ったりしないだろう。

だが、あのサーヴァントはどうだ？

いくら積極的に戦闘に参加するような奴ではないとはいえ、己を

王の中の王と言い憚らない彼が、この挑発に耐えられるものだろうか。

いや、耐えられる筈がない。

「我を差し置いて”王”を称する不埒者が、一夜に二匹も湧くとはな……」

眩い黄金の輝きと共に、英雄王ギルガメッシュが降臨した。

そして、緒戦よりこの最強のサーヴァントが参戦するという事実
に、改めて戦慄を覚える。

「難癖つけられたところでなあ……イスカンダルたる余は、余に知
れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真に王たる英雄は、天上天下に我ただ一人。あとは有象
無象の雑種にすぎん」

あまりにも傲岸不遜なギルガメッシュの言動に、さしものライダー
も若干辟易とした様相を見せている。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りあげたらどうだ？ 貴様も王
たる者ならば、まさかおのれの威名を憚りはすまい？」

破天荒なライダーにしては幾分まともな問いではある。だがあの英雄王の前ではただの質問一つが命取りにも成りうる。

「問いをなげるか？ 雑種風情が、王たるこの我に向けて？」

ギルガメツシュが、殺意を剥き出しにする。

マスターには悪いが、奴との戦闘において出し惜しみは死に直結する。ゆえ、クラスの偽装が早々にバレるのを承知していても、全力を以て対応する必要がある。

何が来ても良いように、撃鉄を落として意識を集中させ、魔術回路に魔力を張り巡らせる。

「我が拝謁の栄に俗してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

死刑宣告にも等しい言葉と同時に、ギルガメツシュの背後の空間に歪みが生じる。

それは、彼を最強のサーヴァントたらしめる要因の一つ、遠坂邸にてアサシンを一瞬で駆逐せしめた宝具 ゲート・オブ・バビロン ”王の財宝”の発動の前兆に他ならない。

そのことを知る知らないを問わず、危険性を感じ取ったサーヴァント達は警戒から臨戦態勢へと瞬時に意識を切り替えた。

斯くして、フェイカーの予想はこの時点で半分だけの中したといえよう。しかし、半分は外れることとなる。

残り半分の想定外。それは、さらなるサーヴァントの参戦に他な

ら無かった。

現れて即座に殲滅態勢へと移行したギルガメッシュに、私を含める倉庫街に集った全ての英霊と魔術師が、緊張と警戒を持って意識を集中させている中、それは起こった。

突如、轟と吹き荒れる魔力の奔流。迸る魔力は次第に凝固していき、英雄王の憤怒をも上回る凶悪な殺気の人型かたまりを形成する。

私の予想を外れて現れた第五のサーヴァント。我が身を突き抜ける凶悪な殺意の波動から、バーサーカーのサーヴァントであることは想像だに難くない。

そしてこの狂戦士もまた、尋常な存在ではなかった。その一端として、戦場に立っている唯一のマスターであるライダーのマスター ウェイバーや、私との視覚共有によりバーサーカーの姿を見ているケイネスらに与えられているサーヴァントの力量を計る”ステータス透視”の能力が通用しなかった。それどころか、バーサーカーの姿形をまともに視認することも叶わない。

かの狂戦士の姿は常に黒い影のようなものに覆われていて、輪郭が幻覚のようにぼやけたり、ぶれたりしている。

どうやら視覚干涉・妨害系のスキルないし宝具によるものらしい。私の数少ない得意魔術である『解析』を以てしてもエラーの結果を弾き出すだけであった。

だがまあ、このことについては後から考察も出来るだろう。

現在目下の問題は、この黒い英霊の
強いて言うならバーサーカーのマスターの意図だ。

この黒い英霊がバーサーカーとして理性を奪われている以上、ライダーの挑発に乗って現れたとは考えにくい。ならば他の原因があるはずだ。と思い、バーサーカーを注意して観察したところ、彼はある一点を凝視していた。そしてその視線の先には

「誰の許しを得て我を見ておる？ 狂犬めが……」

十メートル弱の高所より、バーサーカーにも劣らない殺意をもって彼を睨み返すギルガメッシュの姿があった。

バーサーカーの視線が心底気に入らないのか、ライダーらに向いていた怒気と宝具と思しき剣と槍の矛先をバーサーカーへと反転させる。

「せめて散り様で我を興じさせよ。雑種」

剣と槍が稲妻が如き閃光と神速を以て、バーサーカーへと殺到する。狙いを定めるでもない無造作な投擲ではあるが、その一撃がどれほどの破壊をもたらすかは明白であった。

故に、誰もがバーサーカーの絶命を予感した。

だが、宝具の投擲を正面から受けて尚もバーサーカーは健在であった。あろう事か初撃の剣を苦もなく掴み取り、その剣を慣れ親しんだ得物のように使いこなし、二撃目の槍を迎撃したのだ。

しかしその行為は、ギルガメッシュの憤怒の炎に油を注ぐこととなった。

ギルガメツシュの背後の空間の歪みが広がり、新たな宝具の群れが展開される。

その数 十六。

「その小癩な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるかさあ、見せてみよ！」

再びバーサーカー目掛けて、先程とは比べものにならない数の宝具が虚空を疾駆する。

それでもバーサーカーは、己に迫る一撃一撃がそれぞれ必殺を誇るにも関わらず一切動じることなかった。時には奪い、時には打ち落とす。武の極みといっても過言ではない程の精錬なる武技をもって、バーサーカーは遂に、ギルガメツシュの放った十六の魔弾を傷一つ負うことなく防ぎきってしまった。

あまりにも常軌を逸した攻防に思わず息を呑む。隣のセイバーも声もなく瞠目していた。それに対して、ライダーは冷静に事態を見据えていたが、ギルガメツシュがさらに三十二の宝具を展開したところで表情から色をなくした。

そして、さらなる激化が予想されたバーサーカーとギルガメツシュの闘争は、ギルガメツシュの退散という形で呆気なく終結した。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質ではなかったようだな」

どうやらライダーは、ギルガメッシュの退散をマスターの指示によるものと解釈したらしい。

事実、ギルガメッシュのこれ以上の暴走を恐れたアーチャーのマスターである遠坂時臣が、サーヴァントへの絶対命令権である”令呪”まで用いてギルガメッシュを諫めたのであった。

戦場に再び静寂が戻る。が、それもすぐに打ち破れることとなる。

当初の目標であったアーチャーの急な退散によつて獲物を失い、途方に暮れていたバーサーカーが、新たな標的を見定めていた。

「……………er……………」

そして一人の相手を、兜のスリットより覗く、狂気と殺意に染まった双眸で見据えて、怨念に汚れた咆哮をあげて突進する。

「……………ar……………er……………ツ！！」

その先に立つのは

騎士王アルトリア。

セイバーとバーサーカーの一撃がぶつかり合うことに、アーチャーの宝具の投擲により荒れ果てていた倉庫街が、もはや更地にせんという勢いで破壊されていく。

無理もないことだ。緒戦でのセイバーとフェイカーの戦いは剛と柔のぶつかり合いであったため、剣戟の余波は抑えられていた。だが、現在進行しているセイバーとバーサーカーの戦いは、剛と剛、力と力のぶつかり合い。一撃毎の余波だけで倉庫街は壊滅していき、大気が鋼の轟音に振るえている。

そしてこの戦いを有利に進めているのは、最優のサーヴァントと称されるセイバー……ではなく、バーサーカーであった。

どうやら、間違いなく優秀であるセイバーのステータスを、この漆黒の騎士は更に上回っているらしく、セイバーの方がどうしても押され気味となっていた。

原因はまだある。バーサーカーの使う得物が、セイバーへと動揺を与えているのだ。

そう、バーサーカーは信じられないことに、ただの街灯のポールの残骸をもってセイバーの聖剣と打ち合っているのだった。だがセイバーは、バーサーカーの扱う鉄屑に広がる黒い筋が、バ

「サーカーの籠手を起点に広がっているのを見て、持ち前の直感によりバーサーカーの宝具の正体を看破した。」

「……そういうことか。あの黒いのが搦んだものは、何であれヤツの宝具になるわけか」

セイバーが気づいたのとほぼ同時に、戦況を見守っていたライダーもバーサーカーの宝具の正体を感じていた。

「ステータスの隠蔽といい、宝具化といい、厄介なサーヴァントだのう。なあ、ランサー」

ライダーは同じく戦況を見守っているであろうと思っていたフェイカーに話しを振った。が、それに応答しうる存在の姿は、倉庫街に見当たらなかった。

「うん？ 彼奴め、帰っちまったんか。つまらんなあ」

話し相手がいつの間にか消えてしまっていたことに落胆しつつも、ライダーは再びセイバーとバーサーカーの死闘へ視線を戻した。

一時はバーサーカーの異常性に気圧され、後手に回っていたセイバーであったが、そのカラクリを見破ったことが自信にも繋がり、戦況を巻き返していた。

悔しいことに最優のサーヴァントであるセイバーでありながら、能力でも技術でも漆黒の騎士に劣ることを痛感していた。が、未来予知に匹敵する『直感』を十二分に生かして五分の戦いへと持っていった。

そしてセイバーの預かり知ることではないが、後十分も戦闘が続けば、バーサーカーのマスターである間桐雁夜に限界が訪れ、バーサーカーは魔力の供給源がなくなりセイバーの勝利が確定していた。

そんな時。突如、セイバーの脳に直接声が響いた。

” 避ける！！ ”

セイバーには聞き覚えのない声。だが、セイバーに念話を送れる相手は一人しかいない。

さらに、声が響いた瞬間。

セイバーの直感が、今までに感じたことのない圧倒的な”死”の予感を知らせた。

セイバーは相対するバーサーカーの存在すらも忘却して、全身全霊での回避を試みる。

しかし、全力の回避も、虚しく徒勞に終わる。

セイバーの意識は、背後より高速で飛来するナニかに自分の肉体が挟られる感触を最後に。

耳朶に轟く爆音と、視界を焼き尽くす白き閃光に吞まれ、

暗い底へと落ちていった

第七夜・死闘、激烈 - (後書き)

後書き

正直、賛否が1：9な内容になってしまっているのではと恐々しております。

デイルがいないのでセイバー弱体化の役割を誰かが変わらないといけなかったたので(汗)。

一応、セイバーさんは救われる予定ですよ。

……………予定です。

次回、脱落者1人

感想・批評お待ちしております

第八夜・暗躍する魔術師

セイバーへバーサーカーが襲いかかると同時に、フェイカーが霊体化して姿を消したことに気がついた者は、最も見晴らしの良い場所を陣取っていたアサシンに、戦場をつぶさに観察していた切嗣と、相方の久宇舞弥だけであった。

「ランサーが姿を消しました。撤退でしょうか？」

「いや。それはないな」

インカムの向こう側から淡々と告げられた質問を即断する切嗣。

「ランサーのマスターに動きは見られない。サーヴァントがマスターを戦場に残したまま撤退するのは不自然だ。

……何か企んでいるのかもしれない。今まで以上に警戒してくれ」

「了解」

切嗣の言うとおり、フェイカーが消えたにも関わらず、ケイネスは倉庫の屋根の上から動こうとはしなかったし、彼の傍らにサーヴァントが現れる様子もなかった。

切嗣は可能性として、サーヴァントは下からせつつもマスター自らが戦闘を見届けるのは有り得るが、それはないと判断していた。切嗣の解析では、ケイネスは魔術師として典型的な慎重派のタイプである。戦場に姿を見せず、幻覚まで使って正体を隠匿していることから、その推測に間違いはないと判断していた。

そして切嗣はひとまず、セイバーの戦いを見守るといふ最初の方針を続行した。

幸い、ライダーも手を出すつもりはないらしく、御者台より戦闘を静観している。

だがそれ故に、二人の戦いは膠着状態へ突入していた。このままでは埒が明かかないと切嗣は判断しながらも、介入する手立てがないことに歯噛みしていた。せめてバーサーカーのマスターを発見出来ていれば、何かしらの選択肢があったかもしれないだろう。

そんな、切嗣が苦渋を味わっていた時だった。

切嗣はふと、よく知る二オイを嗅ぎつけた。

数多の戦場を生き抜くことで培ってきた、
嗅覚。それにより切嗣は、誰よりも早く、自分と同じ狙撃手スナイパーの存在を察知していた。さらには、プロの暗殺者としての直感から狙撃手の居場所を推定する。それは、ちょうどセイバーの背後であった。

切嗣は迷う間もなく、霊体化したタイミングから狙撃手がランサーであると判断し、ケイネスを銃殺することは決断する。普通、遠距離の狙撃が可能であるのは槍兵ランサーではなく、弓兵アーチャーのサーヴァントぐらいなものだ。が、何事にも例外はあるものだと、切嗣は自身の直感を信じて疑わなかった。

既にランサーが狙撃態勢でいると判断した切嗣は、相方への連絡する手間すら惜しみ、最低限の狙いを付けて引き金を引こうとする。

だが、銃弾が放たれることはなかった。

彼方より発せられた殺気が、切嗣の総身を震わせて引き金を引く指を止めさせた。殺気にはフェイカーの意思が込められていた。

” 引けば、射る ” と。

もしケイネスを銃殺せしめても、その場合は己の命が確実に失われることを悟る切嗣。

もはや、彼には無駄な意地をかなぐり捨てて、セイバーに念話で警告を発するしか手はなかった。

倉庫街より数キロ離れたビルの屋上より、フェイカーは殺意を無くした切嗣を尻目にして、激闘を演じる二騎のサーヴァントへと視線を移す。

そして、既に弓へ番えられていた”砲”の形態の方天画戟を引き絞る。狙いは、戦闘に集中し無防備に晒されているセイバーの背中。しかし、尋常な決闘を中断されたまま、このような方法でセイバーを葬り去ることに、フェイカーは確かな未練と躊躇を覚えていた。

だが

「I am the bone of my sword

” 体は剣でできている ”

自然とフェイカーの口より紡がれた、彼自身を象徴する呪文。身も心も剣はがねに作り変えて、未練も躊躇も切り捨てる。

フェイカーの眼には仕留める獲物の姿だけが映り、脳はそれを射止めることだけを思考していた。

だが、心の隅では気付いていたのだろう。

自分が完全には割り切れていないことに。マスターである衛宮切嗣を狙わないことが、その証であることに

「 ” 軍神五兵 ” 」
ゴッドフォース

それでも、戟やは放たれた。方天画戟から呂布奉先の射の技術と経験を『投影』して放たれた戟やは、寸分変わらず目標目がけて夜空を疾走する。

必殺を期した一撃。だがセイバーは、神業めいた回避で直撃を免れ、バーサーカーはアーチャーの攻撃と同様、果敢にも戟やを掴み取るうと動く。

しかし、フェイカーは周到だった。

宝具の真名解放にも匹敵する爆発が発生する。戦火の中心で起こったそれは、容赦なく両者を巻き込み、吹き飛ばした。

だが、爆発が直撃だったにも関わらず、両者の耐久及び幸運の高さ故か、セイバーもバーサーカーも虫の息ながら存命であった。

それを見て取ったフェイカーは、ただ冷静に二本の矢を新たに弓へと番える。先ほどとは違って宝具ではなく普通の矢だったが、フェイカーにより『強化』の施されたそれは、瀕死のセイバー達の命を刈り取るには十分だった。眇められた鈍色の瞳で獲物を見据え、狙いを定めるフェイカー。

しかし彼は急に構えを解き、そのまま弓矢を破棄してしまった。

「……潮時か」

フェイカーは遙か前方を見据えながら低く呟くと、アサシンより複写した『気配遮断』を発動させながら、今度こそ撤退の為に霊体化してケイネスの下へ去っていった。

フェイカーが去って間もなく、彼が狙撃ポイントとしていたビルに戦車の宝具ゴルドエイアス・ホイール”神威の車輪”に乗ったライダーらが来た。た。

「むう……おかしいのう。確かにここら辺りから飛んできたハズなんだがなあ」

「……つかさ、お前何するつもりで此処まで来たんだよ？ 僕たちも途中で撃たれるかもしれなかったんだぞ！？」

「フン、決まっておろう。戦士の一騎打ちに横槍を入れるような無粋な輩には、征服王たる余、自らが誅罰を下さなければなるまい」

ライダーは自身の憤怒を発露しつつ、厳かに深みある声で唸る。

「でも、居ないじゃないか。もうどこかに行っちゃったんじゃないのか？」

「ぬう。せめて気配ぐらいは捉えられると思ったんだがなあ」

「だけど失敗した、と……はあ」

骨折り損となった自分達の　　というよりもライダーの行為に思わず嘆息するウェイバー。

「それで？　これからどうするんだよ？」

「うん？　そんなことはマスターである貴様が決めんかい」

「な……！？」

ウェイバーは、今まで散々好き勝手やっておいて今更なことを言うライダーに憤慨しつつも、なんとか冷静さを取り戻して状況を判断することに努めた。

「……セイバー達は、放っておいていいのか？」

「ああ、構わん。下手に恩を与えつけたら余の臣下に降る時に、要らぬ雑念が混ざるかもしれんからのう」

「……………」

ライダーはウェイバーの問いを、助ける必要がないかという意味で受け取ったが、ウェイバーの問いの本来の意味合いとは些かズレたものであった。が、ウェイバーは取り立てて訂正しようとはしなかった。決して、ライダーのド突きやデコピンを恐れた訳ではない。と、心の中で自分自身に言い聞かせる。

「それじゃあ帰るぞ。今日は……疲れた」

「うむ、余も想像以上の強者どもと相見えることができたからなあ……………フフ、滾ってくるのう」

「……………バカ」

ライダーの豪放磊落な性格を、今日という一日を通して改めて思い知らされたウェイバーのぼやきは、牡牛の蹄が鳴らす稲妻の音に掻き消され、戦車を駆るライダーの耳には届かなかった。

場所は戻って倉庫街。フェイカーの起こした爆発は、甚大な破壊をもたらしていた。爆発の中心には巨大なクレーターができ、爆風により積み上げられたコンテナが崩壊し、倉庫街は見るも無惨な有様と化していた。

そして爆発に巻き込まれたセイバーは、爆風で吹き飛ばされてプレハブの壁に叩きつけられてから、死体のように微動だにしなかった。

「セイバー!!!」

そんなセイバーに、悲痛の叫びをあげながら駆け寄るアイリスフィール。セイバーの下へ辿り着くと、傷を窺うように膝をつく。

「……………!! ひどい……………」

思わず陰鬱に呟くアイリスフィール。それほどまでにセイバーの傷は酷いものであった。

腹部の半分が失われている様は、只人の身であったなら即死も同然である。とてもでないが、この場でできる即成の治療魔術ではその場しのぎにもならず、拠点での大規模なものが必要なのは明白であった。故に、アイリスフィールはどうかしてセイバーを、出来るだけ傷に響かないように運ぼうしていた。その時。

彼女達とは別の気配が、ゆつくりと動き出そうとしていた。そう、黒き影を纏いし英霊

バーサーカーだ。

バーサーカーも爆発によりかなりのダメージを負ったのか、這いつくばった姿勢から両腕で上体をあげた状態のまま、全身を痙攣させるだけで起き上がることは叶わない様子だった。しかし、兜のスリットより向けられるバーサーカーの憎悪と殺意に染まった双眸は、依然として燃え盛っており衰える様子はなかった。

「あ……」

セイバーの側にいたアイリスフィールもまた、その人のものとは思えない狂気の眼差しを浴びせられ、全身を硬直させて腰を抜かしてしまった。そんなアイリスフィールに、既に起き上がることを諦めたらしいバーサーカーが、地面を這いながら徐々に接近していく。逃げなければ。そう思いながらも、アイリスフィールはその場から一步も動くことができなかった。バーサーカーがアイリスフィールの下に辿り着いたならば、セイバーの意識がない状態の彼女達は抵抗する手だてもない為、バーサーカーが瀕死であるうとも簡単に殺されてしまうだろう。

そんな絶体絶命の危機へとアイリスフィールとセイバーが陥っている時、彼女らを庇うように一つの影が躍り出た

久宇舞弥だ。

舞弥はそのまま、這い寄るバーサーカーに向けて手に持つ短機関銃の火を噴かせた。如何に強力な兵器とはいえ、魔術的效果を持たなければ英霊にダメージは与えられない。それでも、瀕死のバーサ

「カーの進行を食い止めるには十分であった。

銃撃を鎧が弾く金属音が閑静な倉庫街に数秒ほど響き渡り、戦闘続行が不能と自覚したバーサーカーが霊体となって退散すると同時に音は止んだ。

舞弥はバーサーカーが完全に撤退したのを確認して、アイリスフィール達の方を振り向いた。

「マダム、ご無事ですな」

「ええ。あなたのお陰よ、舞弥さん」

ホツとした安堵の息と共に返されたアイリスフィールの答えを聞いた舞弥は、スッと右手をアイリスフィールに差し出した。

「お手を取って下さい。近場に車を用意しておりますので案内します。セイバーもそれで運びます」

「郊外にある城ね？ 確かに其処ならセイバーの治療も可能ね。お願いするわ、舞弥さん」

「はい」

舞弥は無表情のままに了承すると、早速行動を開始した。

冬木ハイアット・ホテル最上階の一室

煌びやかな高級家具にて彩られたスイートルームにて、初戦を終えて帰還したフェイカーとケイネスが、ソラウを交えて所謂、今宵の戦闘における反省会を開いていた。

「さて、最初に賞賛の言葉を贈っておこうか。期待以上の戦果であったぞ、フェイカー」

「勿体無いお言葉だ、マスター」

開口一番、気色の良い表情のケイネスより告げられた言葉は、彼が滅多に口にする事のないであろう賞賛の言葉であった。

「特に難敵に成り得るセイバーとバーサーカーに重傷を負わせたことは大きい。」

「……それ故に、確実に殺しておきたかったのだがな。チツ、ウエイバー・ベルベツトめ……」

己の聖遺物を盗み出し、あるうことが聖杯戦争のマスターとして現れ、確実に厄介な敵を葬る機会を邪魔立てした教え子を思い出したケイネスは、一転して表情を怒りと苦渋に歪める。自身の召喚する筈だったライダーに、ウエイバーより劣ると言われたことも、それを増長しているのだろう。

「あまり気を病まない方が良くぞマスター。所詮は敵の言葉だ」

そんなケイネスを宥めようとしたフェイカーであったが、ケイネ

スより自分に向けられた視線から、その怒りの矛先が自分へと移されたことを悟る。

「……フェイカー。結果が良かったから目を瞑っていたが……貴様のセイバーとの戦いは一体何のつもりだ？」

「……何のつもりとは？」

「『投影』の多用に決まっているであろう。あれほどあからさまに使いおつて、わざわざ考察した私の策が無駄となるであろうが！」

「ム……」

ケイネスの怒声に言葉を詰まらせるフェイカー。一応ながら、ケイネスの言葉の方に理があった。

ケイネスがフェイカーに指示した策。それは、サーヴァントのクラスと真名の偽装であった。

通常、聖杯戦争に参加する魔術師はサーヴァントのクラスや真名を隠匿することに尽力する。そこを、フェイカーの英霊としての能力を聞いたケイネスは、クラスや真名を隠すのではなく、全く別のサーヴァントのクラスと真名をフェイカーに偽装させ、他の魔術師や英霊達を騙すことを思いついた。

そこでケイネスは、フェイカーに別のサーヴァントに成りきることを命じた。そしてフェイカーが偽装する英霊に選んだのが”呂布奉先”である。

フェイカーの主武装が中華刀の”干将・莫也”であったため、中国の英霊であることと、多くのクラス適性があり、知名度が高い英霊であることが決め手となった。それに対してフェイカー自身のス

テータスの低さがネックではあるが、呂布の代名詞たる方天画戟を見せられて、よもや他の英霊を思い浮かべる者はいないだろうと判断した。

そんな策も、フェイカーが『投影』魔術師であると見破られた途端に破綻してしまう。さきのセイバー戦においても、セイバーはまさだしも、伝統ある魔術師の家系のアイリスフィールはもしかしたらバれてしまっていたかもしれない。が、フェイカーの『投影』はただの『投影』ではなく、異端のものなのでその可能性は実際のところは低いであろう。

だからと言って、ケイネスの怒りは収まりはしない。

「だいたい貴様は」

「それくらいにしておきなさい。ケイネス」

「……ソラウ？」

ケイネスの言葉は遮ったのは、彼の婚約者のソラウだった。

「ケイネス。自分のしていることが八つ当たりだってことぐらい、あなたも分かっているでしょう？ これ以上は見苦しくてよ」

「だ、だが……」

「何度も言わせないで頂戴。私の夫であるなら、もっと泰然と構えなさい。些細なことに固執し過ぎよ、ケイネス」

「ぐ……」

忽ち静寂と共に微妙な空気が部屋中を支配する。が、フェイカーはそれをあっさり打ち破った。

「ソラウ嬢、それぐらいにしておいて欲しい。柄にもなく戦闘中に昇ってしまった私に非があることに違いはない」

「そうね。戦闘中に昇るなんて貴方らしくないわね。もっとニヒルな人なのだと思っていたのだけど……。何かセイバーに思うところでもあったのかしら？」

「いや」

僅かに逡巡するフェイカー。思い馳せるのは、セイバーより贈られた賞賛の言葉。己の人生をかけて磨き上げた剣技が、片時も忘れることなく常に頂点として掲げ続けてきた憧憬の存在に認められた瞬間は、全てに絶望した彼を以てして”報われた”と刹那に思わせるものであった。

「大したことはない」

そんな諸々の感情を全て抑え込み、フェイカーは虚ろげな笑みを浮かべた。ソラウは納得にしていまいようだったが、深く立ち入るつもりはなかったのか、それ以上は追求はしなかった。

ここで唐突に、話しからあぶれていたケイネスが蚊帳の外に耐えられなかったのか、口を挟んできた。

「そんなことよりだ！ フェイカー、貴様の『投影』は一度見るだ

「だけで複製が可能なのだな？」

「ああ、その通りだが……」

フェイカーはケイネスの質問の意図を図りかねて返事を濁らせる。

「ならば、あの黄金のアーチャーが使った宝具、全ての複製が可能か？」

「ああ」

得心がいったというような表情をするフェイカー。そして、口角を吊り上げながらケイネスに返答する。

「無論だ。今宵の戦闘で視認した全ての宝具の投影及び、真名解放が可能だ。いや、セイバーの剣は難しいかもしれん。流石に”神造兵器”とあっては、生前が人である私には厳しい」

否定的な意見で締められたらフェイカーの返答だったが、ケイネスの表情は満足気であった。

「そうか……ならばこうしよう。基本、貴様は”呂布”として振る舞え。だが、無理することはない。臨機応変に貴様の『投影』を生かして敵を翻弄し、虚を突くがいい。

アーチャーは別だ。貴様の異能の全力を以て対応しろ。アレを使っても構わん。相性は悪くない筈だ。

これで全てのサーヴァントに対して有利に戦いを進められる。クツクツク……この戦い、私の勝利だ！！」

高々と宣告するケイネス。最早彼は、己こそが聖杯戦争の覇者と

なることを確信していた。

今この時、彼らを陥れようと蠢いている存在も知らずに

「 以上が、今宵の戦闘の顛末です」

『 フム。ご苦勞だった、綺礼』

冬木教会の地下室にて、遠坂時臣と言峰綺礼の密かな通信が行われていた。アサシンの分身宝具 ” 妄想幻像^{ザバーニヤ} ” を利用して、偽りの敗戦と不仲を演じた彼らは、今も尚、他のマスター達を謀って秘密の協力関係を継続していた。

これもその一環であり、アサシンに偵察させた戦闘の内容を綺礼が時臣に報告していたところだ。

『 それにしても、セイバーと剣で渡り合い、アサシンの視界外距離からの狙撃を行うランサーとはな……流石はかの ” 呂 奉先 ” といったところか。特に、サーヴァントの感知出来る範囲外からAランク宝具級の一撃を放てるというのは脅威だな』

「それは心配要らないでしょう。ギルガメッシュの戦闘時にアサシンを狙撃が可能と思われる箇所に配置すれば」

『それもそうか……ならば綺礼、君は引き続きマスター達の拠点とキャスターの捜索にあたってくれ』

「了解しました。^{マスター}導師」

綺礼の返事を最後に、通信機の役割を停止していた蓄音機は機能を停止させた。次に使うまでは、ただのアンティークな一品にすぎなくなつた。

「良かったのか？ 親父」

報告を終わらせて一息を吐いていた綺礼に、まだ幼さを感じられる男の子の声がかけられた。言わずもがな、彼の息子である言峰士郎その人だ。

「何がだ、士郎」

「いや、今の報告って穴だらけじゃないか。アイツ……呂布じゃないだろ？ しかもアレって俺と同じ『投影』じゃなかったか？」

「それはあくまで推測に過ぎん。そんな不確定要素の報告は要らぬ混乱を招くだけだ」

「そうか……？」

いまいち納得いかない様子の子の士郎であったが、綺礼がそう言う以

上そういつものだろうと結論づけた。

「そんなことより士郎。準備をしろ」

「準備？　なんでさ？」

キョトンと小首を傾げる士郎。時臣の指示ではアサシンを動かすだけで、士郎と綺礼は教会から出る必要すらないはずだった。

「……………戦だ」

士郎は後に語った。

そう呟いた綺礼の表情は、明日が待ちきれない子供のソレであった。即ち、成人男性が浮かべるには不気味な笑みだった。

倉庫街の戦場となった場所から幾分離れた路地。そのマンホールを押し上げて一人の人間が這い出て来た。彼の名は間桐雁夜、御三家の一家である間桐家の人間でありながら一度は魔導の道より逃げ出した人間であった。

しかし、とある幼い少女を救う条件として聖杯を手に入れなければ

ばならなくなり、聖杯戦争に参加する次第となったのだった。

そして今宵の戦闘においても、とある事情から私怨のある遠坂時臣のサーヴァントを消し去るために、戦場に己のサーヴァントであるバーサーカーを放った。そして見事に時臣のサーヴァントであるアーチャーの撃退の成功した。

が、その後にバーサーカーが制御不能となり暴走したため、雁夜は魔力の供給において発生する、自身の身体に埋め込まれた”刻印虫”の活性化により途轍もない激痛に苛まれていた。

バーサーカーが戦闘不能になることでようやくそれが収まったのだが、雁夜の身体は血塗れのボロ雑巾と化していた。故に下水道からの脱出に戦闘終了から一時間近く要したのだった。

そうして外へ出て新鮮な空気を吸うことで、雁夜は生き返った心地と共に、緊張に強張っていた肉体が弛緩するのを感じた。

瞬間。雁夜の身体を謎の圧力が押し潰した。

「ガ ……ッ!」

まるで空気が重さを持ったかのように這いつくばる雁夜の身体に

のしかかる。全身が耐えきれずに軋みをあげ、肺が圧迫されてまともにも声も出すことも出来ない。

「……………、……………ッ！！」

再び全身に走る激痛に悶えなくなるも、先程からかかる謎の圧力がそれを許さない。

明らかに敵からの攻撃であることを理解した雁夜だが、とても令呪が使える精神状態ではなく、そもそもバーサーカーは自分と同等の重傷であるため戦闘などできるわけなかった。目的を達成するまでは負ける訳にはいかない。と、思いながらも、どうしようもない程に絶望的な状況であった。

そして、雁夜がもはや万事休すであると悟った時。

ふと、前方に人の気配が立つのを感じた。

なんとかその姿を確認しようとするも、這いつくばった姿勢を強要されている雁夜には相手の足元　　黒いローブの裾を確認するのが限界だった。

その光景を最期に

間桐雁夜の聖杯戦争は早々に終わりを告げた。

第八夜・暗躍する魔術師・（後書き）

後書き

雁夜おじさん……遠くへ逝っちゃったよ。

というわけで最初の脱落者は間桐雁夜でした。

感想で予想してくれた”千葉 久々”様。今はただ50点です、とだけお応えしておきます。サブタイトルは立派なヒントです。

次回、「強襲」

感想・批評お待ちしております。

第九夜 - 強襲 -

冬木市市外・西方へ三十キロ

そこには、ほとんど人の手の加えられていない鬱蒼と生い茂る森林地帯が広がっている。その森林地帯は、登録上の名義では外資系企業の私有地となっていた。

されどその実体は、伝統的魔術師の一族であり聖杯戦争を形成した御三家の一つであるアインツベルンが頭首　　ユーブスタクハイトが聖杯戦争におけるアインツベルンの拠点として森林地帯をまるごと買い取ったものである。故に、この樹海は魔術師達の間では、知る人ぞ知る『アインツベルンの森』の名称で呼ばれている。さらに、ユーブスタクハイトによって森林地帯の全域を結界として外界から隔離され数多の幻覚によって守られたその奥には、石造りの古風で壮麗な城が築かれていた。

そして、その壮麗なる城の一室として設えられている城の外観を裏切らない豪華で絢爛な装飾の施されたサロンに、一人の冷たい空気を纏った女性が沈黙と共にひっそりと佇んでいた。

彼女の名前は久宇舞弥。幼少時に戦場にて衛宮切嗣に拾われ、彼から暗殺術から魔術にまでわたる様々な技術を教えこまれ、今では切嗣にとって相棒であり、ある意味欠かせない存在へとなっていた。

そんな、目蓋を閉ざしてテーブルに座していた彼女の　　切

嗣の教育による賜物が弊害か　機械のように色のない表情に
僅かな動きを見せた。切れ長な目を開き、視線を顔ごとサロンの入
口の開かれた扉へと向ける。

そこには、よれよれのコートを着た男。

舞弥の人生を決定づけた男である衛宮切嗣が立っていた。

彼はついで倉庫街の死闘においてロード・エルメロイの殺害が叶
わなかったため、撤退するロード・エルメロイを、拠点である冬木
ハイアット・ホテルまで追跡し、必要とあればロード・エルメロイ
が来日する以前より設えていた仕掛けを用い、ホテルごと爆破して
かの天才魔術師を聖杯戦争より退場させる予定であった。

確実に勝てる戦いしか挑まない極度の慎重派である切嗣が、序盤
から此処までの強硬手段を選んだのは、ひとえにロード・エルメロ
イよりも彼のサーヴァントの方に脅威を感じたからであった。彼ら
しくもなくただ直感のみで、倉庫街の戦いに終焉をもたらすことと
なった彗星の如き一撃を放った主は、ランサーであると判断してい
たためだ。

そしてこの計画には、その成功率の完全性を期するために舞弥も
切嗣に随行する予定であったのだが、セイバーの容態がそれ以上に
事を急ぐ次第であったため、彼らは別行動と相成ったのである。

別れてから数時間。日をまたいで帰還した切嗣に視線を向けた舞
弥は、切嗣の表情に疑念を覚えた。

彼も舞弥同様、無表情と大差のない無機質な表情を浮かべている。
だが、切嗣と付き合いの長い舞弥は彼の表情が僅かながらも曇って
いることに気づいたのである。

「首尾の方は？」

「……………」

些細な疑念から生じた舞弥の問いに対して、切嗣は無言のまま頭を横に振って答えた。その答えに、鉄面皮である舞弥でさえ僅かな驚きを顔に浮かべる。

切嗣と共に数多の戦場を駆け抜けてきた舞弥は、切嗣の暗殺者としての手際の良さはもちろん熟知している。故に、ホテルの爆破解体程度は切嗣にとってお手のものである筈だと彼女は考えていた。

「先客がいた。今頃、ニュースにでもなっているだろう」

切嗣は特に取り繕う様子もなく淡々と告げる。

そして、この軽い弁明だけで十分だと判断したのか、切嗣はそれ以上語ろうとはしなかった。舞弥もまた、少なくとも切嗣の意図には納得したのか、口を開くことはなかった。

「それより、アイリは何処だ？」

「…………… 昨晚から付きつきりでセイバーの治療と看病をしています」

「治療は終わっているんだな？ なら、ここにアイリを連れてきてくれ。今後について話し合っておくことがある」

「了解」

言葉短に了承すると、舞弥は直ぐさまサロンを出て、アイリスフイールのいる儀式場へと向かっていった。

そして数分後。舞弥がアイリスフィールを連れてサロンへと戻って来た。アイリスフィールは徹夜でセイバーの治療の儀式に取り組んでいたためか、そこはかたなく疲労しているようであった。

「アイリ、疲れているかもしれないが我慢して欲しい」

「…私は大丈夫よ。切嗣」

妻であるアイリスフィールを気遣う言葉をかける。徹夜であったアイリスフィールは、少なからず眠気と怠惰を感じてはいたが、それは切嗣達も同じことだと言い聞かせ、気を張っていた。

「……そうか。それなら、今から会議を始める」

一瞬、瞳に心配する光を宿した切嗣だったが、直ぐに感情を切り替えてテーブルへと身体を向ける。その表情は、幾多もの死線をクリック抜けてきた歴戦の戦士のそれであった。

「まずは、アイリ。セイバーの容態を聞かせて欲しい」

「ええ、分かったわ」

アイリスフィールは律儀にテーブルから立ち上がって、発言の体をとる。

「……最善は尽くしたのだけれど、とても戦闘が出来る状態ではな

いわ。セイバーの自己再生能力を考慮しても、せめて今日一日は休ませる必要があるわ」

「そうか……あれほどの威力の宝具を喰らったんだ。その程度で済んだだけでも御の字だろう」

「いいえ。違うわ」

苦々しく吐かれた切嗣の眩きに対して、否定の意を唱えるアイリスフィール。切嗣は、多少面食らった様相を見せながらも、ごく冷静に問い返した。

「何が違うんだい、アイリ？」

「切嗣は遠くから見ていたみたいだから判別がつかなかったのかも
しれないけど、アレは宝具の真名解放ではないわ
ン・ファンタズム
”壊れた幻想”よ
”壊れた幻想”よ」

「……………本当かい？」

アイリスフィールの発した内容に、切嗣は眼の色を変えて食いついた。それほどまでに、アイリスフィールの発した内容は彼にとつて衝撃的なものであった。

何故ならば、宝具の真名解放が”奥の手”ならば、
”壊れた幻想”
ブロックン・ファンタズム
”禁じ手”と称されるようなものであるからだ。

宝具には全てランクが付けられており、ランクの高さに比例して、その宝具に宿る神秘と魔力も高くなる。
”壊れた幻想”とは、その
ブロックン・ファンタズム
宝具に宿っている神秘と魔力を、宝具の崩壊を代償に爆発させ、真

名解放にも匹敵する破壊をもたらす技のことをいう。言わば、宝具を魔力の爆弾として扱うのだ。

そしてこの技が禁じ手となる所以が、先にも述べた宝具の崩壊という代償である。この技は、意図的に自身の宝具を破壊することによって、宝具に宿る魔力による爆発を起こすものだ。

しかし、一度破壊されてしまった宝具を修復することは、ほぼ不可能に等しい。つまり、サーヴァントにとっては自身の半身かつ切り札である存在を、みすみす捨て去るような行為である。

故に、この技は好き好んで使われる　　ましてやこんな序盤の戦闘から積極的に使われるような戦法ではない。アーチャーのように、幾つもの宝具を持つなら別ではあるが……………。

「……………解せないな」

そういった諸々の事情を鑑みつつ、切嗣は懐疑的に呟いた。

「アイリ、舞弥。どう思う?」

言葉短に問い掛ける切嗣。それでも彼女らは、切嗣の質問の意図するところをしっかりと把握していた。

「あの黄金のサーヴァントの仕様じゃないかしら。不意打ちをしそうな性格ではなかったけれど……………」

「私もそう思います。性格はともあれ、アーチャーは十分に条件を満たしています」

「……………成る程。やはり、そう思うか」

切嗣は彼女達の答えを粛々と受け止めている。彼自身はあの時、狙撃手の正体をランサーと断じた。

だが、投擲で可能な範囲を超えた遠距離からの狙撃という攻撃手段に、英霊にとって虎の子である宝具をあっさりと使い捨てる戦法。

否が応にも、アーチャーであり大量の宝具を持つ黄金のサーヴァントを連想させた。

「切嗣は違うと思っているの？」

「……いや、僕のは勘に頼った憶測だ。取りあえず、ランサーとアーチャー以外のサーヴァントと戦闘する時には、狙撃に警戒をするようにしてほしいくれ」

「分かつ……！！」

切嗣の警告に同意しようとしていたアイリスフィールが、突然何かに反応するかのように席から弾け立った。切嗣と舞弥も、急な奇行を起こしたアイリスフィールへと注目する。

「……アイリ」

そして切嗣は、アイリスフィールの顔色から何が起きたのかを即座に悟りつつ、それを確かめるように緊張を孕んだ声音で、彼女に先を促す。

「ええ。敵襲よ」

答えるアイリスフィールの声は絶望に染まっていた。何故なら、自分達のサーヴァントであるセイバーは現在戦闘不能の状態である

からだ。

アイリスフィールが外敵の侵入を感知した後。切嗣達は会議の内容を急遽、敵をどう迎え撃つかへと変更していた。

はっきり明言すると、切嗣達は圧倒的に不利な状況だ。切嗣の当初の予定では、今回の聖杯戦争においてこのアインツベルン城を使用する予定はなかった。だがセイバーの容態が急を要するものであったため、深山の方に用意した武家屋敷でなく、直ぐに大規模な治療儀式の可能であったこの城を使わざるを得なかったのだ。

そんな予定外の事態であり、しかもアイリスフィールは一晩付きつきりで治療にあたっていたため、アインツベルンの森に張られている結界の術式を把握している暇もなく、せいぜい警鐘の機能を働かせることしか出来ないのであった。

勿論、それは敵の姿の確認も出来ないことも意味している。切嗣達に分かることは敵の数と侵入してきた箇所程度であった。

「アイリ、敵の数は二人。そして侵入箇所は南の方角で間違いないかい？」

「ええ。その通りよ」

「そうか……」

アイリスフィールの結果より得た情報を聞いた切嗣の思考は、一組のマスターとサーヴァントの対処へと傾いていた。

当然である。聖杯戦争の最中、敵の拠点に二人で侵入してくる輩といえは、魔術師と英霊の組み合わせに他ならないというのが常識的な考えだろう。

「舞弥。カメラやトラップの設置はしてあるか？」

「城の内部のみならば完了しています」

「よし。舞弥はセイバーとアイリを連れて北から脱出してくれ」

「わかりました」

切嗣はこれで指示は済んだ言わんばかり口を閉ざし、舞弥もその旨を理解したのか、アイリスフィールを連れてサロンを出ようとす。そして、そのまま流れに乗せられそうになっていたアイリスフィールであったが、ある一つの触れられていない事柄に気づき、慌てて引き留まった。

「　　待つて！」

鋭く放たれた声に、舞弥は歩みを止め、押し黙り俯いていた切嗣も顔を上げて、叫声の主たるアイリスフィールを見やる。

視線を集めたアイリスフィールは、若干ばつの悪そうな表情をしながらも決意を込めて再び言葉を発する。

「……切嗣は？ 切嗣はどうするつもりなの？」

敢えて語らなかつたのであろうソレを、アイリスフィールは答えに不安を抱きながらも問い掛けた。

「僕は城に残って、敵を迎え撃つ」

幾ばくかの間を置き、切嗣は一切の感情の揺らぎを見せることなくそう断言した。

迫り来る魔術師と英霊を相手に一人で迎え撃つ もはや
蛮勇とさえ言えない愚策の極みである。

聖杯戦争において超常の存在たる英霊は、同じく英霊を以て太刀打ちすることが定石だ。故に、切嗣の決意は自殺志願に等しいものである。勝ち目どころか時間稼ぎにもならない と、普通は
そう考えられるであらう。

だが、衛宮切嗣は”魔術師殺し”である。

そんな彼にとってサーヴァントの存在は元より眼中に在らず。その焦点は、サーヴァントを引き連れて来る魔術師マスターのみ当てられていた。

「大丈夫だよ、アイリ。なにも正面から相対しようってわけじゃな

い。僕は徹底的に、陰からマスターを狙い撃つだけさ」

アイリスフィールを安心させようとした切嗣の言葉。だが”魔術師殺し”として放たれたそれは、彼女にとって逆効果でしかなかった。

自分の知らない、夫の醸し出す雰囲気。

自分の知らない、夫の浮かべる表情。

自分の知らない、夫の響かす声音。

机上の理想を求め、不器用ながらも家族を確かに愛してくれる夫である衛宮切嗣の姿しか知らないアイリスフィールにとって、自分の知らない”魔術師殺し”としての衛宮切嗣の姿は、彼女の心に不安という暗い影を落としていた。

けれど、切嗣の足を引っ張りたくないアイリスフィールはその心の内を表へと出させることはなかった。

「……忘れないで。切嗣、私が命を捧げて叶えるべき願いの持ち主はあなただけよ」

「 勿論だ。アイリ」

静かに答える切嗣。その脳裏には、アイリスフィールの夫として過ごした軌跡と、遠い冬の城で自分の帰りを待っている最愛の娘の姿が浮かんでいた。

（ 覚悟を決める。イリヤから母親を奪うことになってしまうのは、聖杯戦争が始まった以上避けられない ならばア
イリの望み通り、僕の理想を成就させるためにその命を使うことこそが、彼女とイリヤへのせめてもの…… ）

切嗣の胸中に迷いはない。聖杯戦争を勝ち抜き己に課した使命を果たすまで、あらゆる権謀術数を以て立ちふさがる全ての敵を狩り尽くす決意のみが そこには有った。

サロンに残された切嗣は、一人城中に設置されたカメラを通して隈無く城内を監視していた。アインツベルンの本家程ではないにしても、一つの建造物としては十分に巨大であるといえるこの城は、広さもまた並ではないため、カメラとその映像を映すモニターの数も膨大なものとなっていた。

敵が単純に正面の扉から入って来るとは限らない故、あらゆる侵入経路を見逃さないようにするためには、これぐらい抜かりない手段を取るのには切嗣にとっては至極当然のことであった。

だが、切嗣の努力をあざ笑うかのように、動きが見られたのは正面の扉とホールを映すモニターだった。

切嗣は少々意表を突かれながらも、侵入者の姿を確認するためにモニターを覗き込む。

注釈すると、切嗣は監視と並行して侵入者の正体に対して考察を行っていた。その結果、消去法から敵はランサーとロード・エルメロイである可能性が高いと判断していた。

アサシンとキャスターに関しては元々論外だ。両者とも正面から敵の陣地に突っ込む戦い方を最良とはしていないからだ。特にアサシンは脱落を偽装までしているのだから尚更である。

バーサーカーも可能性はほぼ皆無だ。かのサーヴァントはセイバ―同様に一晩ごときでは到底癒えないようなダメージを受けていた。それが翌日に戦いを仕掛けることなど出来ない筈。

残るライダーとアーチャーとランサーについては、全員とも倉庫街の戦いにてダメージらしいダメージを負っていない。しかしその倉庫街の戦いを参考にすると、ライダーは移動を常にあの戦車の宝具で行っているようだから今回のケースからは外れる。アーチャーは引きこもりの遠坂時臣がマスターであるから今回の襲撃の犯人とは考え難い。

ならば、今回の襲撃の犯人はロード・エルメロイの陣営で間違いないであろう。

動機もある。昨夜の事件で失うこととなったであろう冬木ハイアット・ホテルに代わる拠点を手に入れるため。又は、セイバーが負傷している今なら楽に切嗣達を排除できると考えられるから。と、他の陣営とは違い切実で確証のある動機が二つもあるから、彼らが侵入者である可能性は高い。切嗣はそう考えていた。

しかしモニターに映された光景は、二重の意味で切嗣の考察を裏切っていた。

扉から入って来たのは、二つの大と小の人影
二十代後半
の青年と十にも満たない子供の二人組。

聖杯戦争に参加するに当たって、自分と同じくマスターとして参加する人物の家族関係まで調べ尽くしていた切嗣には、それが言峰綺礼と言峰士郎であることは瞬時に理解出来た。
だが、一つ解せないことがあった。

(サーヴァントを連れていない……?)

そう。結界の探知した二人組を、切嗣は^{マスター}魔術師と^{サーヴァント}英霊であると考えていた。しかし、実際に自身の目で確認してみれば^{マスター}魔術師とその息子であることに、切嗣は疑問を覚えずにはいられなかった。

(言峰綺礼のサーヴァントはアサシン……… まさか!!)

とある可能性へと思いついた切嗣は、コートの内側に仕舞ってあった無線通信機を取り出した。

「舞弥! 応答しろ、舞弥!!」

緊迫に叫ばれた呼びかけに、答えるのはただの沈黙であった。

状況は、切嗣の予想以上に最悪のものとなっていた。

第九夜・強襲・（後書き）

後書き

少しばかり綺礼と切嗣がメインの話しが続きます。

ケイネスとフェイカーにも何かがあったことを匂わせていますが、彼らのメインなその話しが終わった以降です。

キャスターと雨生くんの登場も同じころになるでしょう。

次回、「アインツベルンの森の死闘」

感想・批評お待ちしております。

第十夜・アインツベルンの森の死闘

切嗣らが襲撃を感知する数刻前。アインツベルンの森の領域の手前、結界の境界線より一步外側に、言峰綺礼と士郎が立っていた。両者の目的は無論、アインツベルン城へと攻め入ることにあつた。

一見すると、両者ともこれから戦闘へ赴く者とは思えない武装一つ持たない格好である。が、身に纏う僧衣は特別製の防弾繊維と大量の防御護符で編まれており、僧衣の下には教会の代行者が使用する概念武装”黒鍵”が柄だけの状態で無数に仕舞われているのだ。

さてここで問題になるのが、既に聖杯戦争より脱落し、教会に保護されている扱いの綺礼が戦闘を行おうとしていることだ。しかも、霊体化して姿は見えないが、二十体ものアサシンを引き連れてここまで来ている。これは明らかに、彼の師である遠坂時臣の意向と指針より脱線した行為である。

しかし、綺礼にはそうまでしてこの戦いを仕掛ける理由があつた。それは衛宮切嗣との邂逅、そして対話のためである。

ついで、倉庫街の戦闘では衛宮切嗣は姿を見せなかったが、教会で小型カメラを装備した蝙蝠の使い魔という、尋常なる魔術師には考えられないような組み合わせのソレを発見したとき、綺礼は衛宮切嗣が聖杯戦争に参加していることを確信した。

そして綺礼は、倉庫街の戦闘にて負傷させられたセイバーの傷が、一朝一夕で回復するものではないと判断した。つまり、今ならばサーヴァントの邪魔が入ることなく、衛宮切嗣に相見えることが可能

であると推測、彼が拠点にしているとアサシンの偵察で判明しているアインツベルン城へと、師の方針を裏切つてまでも攻め入る決断へと至つたのだ。

「ふむ……この程度の結界ならば恐るるに足らんな。」

私と士郎はこのまま正面より侵入する。アサシンは正面以外を霊体のまま、結界に探知されない位置にて包囲しろ。もし人間が城より出てきたら、全て捕縛しろ」

『了解致しました』

綺礼が命令を発すると、姿の見えない凶手らを代表して女性のアサシンが命令を承り、各々の役割を果たすためにアインツベルンの森の中へと散つていった。

あとには、通常の視覚上に変化は見られないが、綺礼と士郎のみが残された形となった。

「よし、俺たちも行こうぜ。親父」

「ククツ、慌てるな士郎」

溢れんばかりの笑顔で張り切る士郎に、諫制の言葉をかける綺礼もまた、僅かながら口元を歪めていた。士郎は純粹な戦闘への昂揚心から、綺礼は衛宮切嗣との邂逅への期待から生まれてくる笑みであった。

「衛宮切嗣が拠点とする以上、この森も奥にある城も魔術的なものは勿論、兵器による悪辣な罠も存在するだろう。『解析』を常に怠らないようにしておけ」

「分かってるぞ」

そうして綺礼と士郎は、一切の躊躇もなく薄気味悪い暗闇と霧の広がるアインツベルンの森へ飛び込んで行った。

一つの黒い影が、並び立つ樹木の合間を縫うようにして疾風の如く駆け抜ける。その影の正体は、先程アインツベルンの森へと侵入した言峰綺礼である。

しかしその速さは、とてもではないが一人間の領域を遥かに凌駕していた。さらに信じ難いことに、数キロはあった道程を僅か五分足らずで走破しようとしていた。

しかも、視界も足場も決して良好ではなく、むしろ最悪と言っても過言ではない早朝の森の道を……である。だがこれも、人の身で人外を討滅することを生業とする異端審問機関 ” 代行者 ” の肩書きを背負っていたことがある、という綺礼の経歴からすれば納得のいく所行であった。

そして綺礼はとうとう、とある理由で一切の魔術防衛の働いていなかった森を抜けた。そんな彼の目前には、中世の時代に迷い込んだかと錯覚させるような巨大な古城が立ちはだかっていた。

「……………」

森を止まることなく一気に走破したにも関わらず息切れ一つして
いない綺礼は、その威風溢れる城をはじつと見つめた。

巨城の壮大さに圧倒された

訳ではない。

ただ、この城に居るはずの衛宮切嗣との邂逅に思いを馳せ、幻視
しているのだ。切嗣との出会いは、遠坂時臣の勝利のサポートとい
う聖杯戦争に参加した当初の目的をも超えて、綺礼にとって最大の
目的と化してしまっていた。

「衛宮、切嗣」

無意識の内に彼の者の名を綺礼が呟いたと同時に、綺礼の足跡を
辿るようにして言峰士郎が現れた。

その姿は今まさに森を抜けて来ましたと言わんばかりに、僧衣が
木の葉と枝にまみれていた。さらに全力で走って来たのか、息も絶
え絶えといった様子であった。若干膝が震えており、立っているだ
けで精一杯といった有様であった。

「なんだ、遅かったではないか士郎。鍛錬が足りておらんぞ」

「……………」

綺礼の虚仮にするような言葉にも、今の士郎では反論することは
叶わなかった。深呼吸を繰り返して、どうにか息を整える士郎。
その間にも、綺礼の嫌がらせは続いた)

「はあ、はあ、ふう……………いい加減にしろ、親父！」

「クク、私は事実を言ったままだ。全力でない私にすら追いつけないようでは…な」

「ちえっ、半分くらい人間辞めている親父と比べるなよ」

「フツ……」

綺礼は士郎の抗議を軽い嘲笑で流すと、踵を返して城の門扉へと向かって行った。

自分の言葉が無視される形となった士郎も、若干膨れつつもその後を黙ってついて行く。綺礼の息子として家族の中でも一番良く接しているだけあって、こういう扱いには慣れてしている様であった。

そして城の門扉の前まで辿り着くと、綺礼は士郎の方を振り返り、視線だけで意図を何かしらの意図を伝える。士郎はその視線を受け止めて綺礼の意図を読み取り、一步前に出て門扉に右手でそっと触れ、とある魔術を発動させた。

「トレス 同調、オン 開始」

一小節の呪文で発動されたそれは、『解析』 正確には『構造把握』の魔術。魔術師にとって基本中の基本となるそれは、極めて限定的な性能の魔術師である士郎でも使用出来る数少ない魔術の一つであった。そのため、綺礼と共に時臣に師事した三年間において極限まで磨き上げられていた。

普通の魔術師ならば極めるどころか初歩で修得しておくそれを、士郎自身の魔術特性と『構造把握』は極めた結果として、膨大な規模を誇るアインツベルンの城を難なく解析することを可能とした。

構造、骨子、材質、年月。本来の『解析』で得られる

以上の情報を悉く解明し尽くしていく。その解析は城だけに止まらず、本来は城に備えられる必要のないであろう”蛇足な設置物”をも完全に把握してしまっていた。

「トレース オフ 同調、完了。」

オーケー。城の構造とか罾の位置と性能は分かった。ついでに鍵も開けといたぜ」

「ご苦労だ。では、行くのでしょうか」

綺礼はそう言うと、両手を門扉へと当てて、城と同様に巨大であるそれを軽々と押し開いた。そして士郎と共に、”魔術師殺し”の狩場へと踏み込んで行った。

アインツベルン城のサロンにて敵を待ち受けていた衛宮切嗣は、その予想外の展開に動揺していた心を鎮め、事態を冷静に判断するように努めていた。この切り替えの早さは、流星は”魔術師殺し”といった所であろう。

結局、応答を得られなかった舞弥達を放置して、切嗣は変わらずこの城で敵を　　言峰綺礼を屠ることへと専念する決断を下した。

だからといって、確実に舞弥やアイリスフィールがアサシンの襲撃を受けていると判断出来る状況で、切嗣はただでこの判断を下した訳ではない。保険は打ってあった。

令呪。サーヴァントを律すると同時に、絶対的な命令権を発動することを可能とする三画の聖痕。

そして令呪には、絶対的命令権の応用的な使用方法として、サーヴァントに能力以上の行動を可能にさせるものがある。切嗣はその使用方法を理解して、ある命令を彼のサーヴァントであるセイバーへと下していた。

” 傷を無視し、死力を以て敵を迎撃せよ ”

戦闘を行える状態でないセイバーを、強制的に戦闘可能にさせる非情な命令であった。

何故なら、いくら令呪の力を以てしても限界があるからだ。今回の切嗣の命令の場合は、傷の痛みを無視した分は後からセイバーへと跳ね返ってくる上、強制的な戦闘可能状態では本来の半分程度の力を発揮するのが精々である。

それでも切嗣は、アサシングらいならば制限された力でもセイバーの元々のスペックの高さならば対応出来ると考えていた。

この思考が、命取りとなる。

だが、それは仕方のないことだ。アサシンの生存を認識していた切嗣でさえも、よもやこの森に数十体のアサシンが潜んでいるとは、考えもつかないことであった。

久宇舞弥が背後より飛来するアサシンの短刀^{ダイク}を回避できたのは偶然の賜物であった。

その短刀^{ダイク}が舞弥ではなく、彼女に背負われたセイバーを狙っていたこと。そしてアサシンが相手が手負いのサーヴァントと人間の女であった故の油断から、気配遮断を怠っていたのが主な要因である。

そのおかげで、切嗣からの通信に応答しようとして手にとっていた無線機を咄嗟に盾代わりにすることでアサシンの奇襲を回避することが出来ていた。

だがアサシンは奇襲に失敗したことを気にすることなく、木の上から地上に降り立ち、両手の指間に短刀^{ダイク}を挟んで正面から舞弥と向かいあった。暗殺者にあるまじき戦闘方法であるが、人間である舞弥を相手取るに当たって、最弱のサーヴァントであるアサシンであっても、これで十分仕留め得ると判断したのだらう。

「
ッ」

想定外であったサーヴァントの襲撃を受けながらも、舞弥はアイリスフィールを守るために、アサシンとの勝機の見えない戦闘を決意する。たとえ勝てなくても、アイリスフィールとセイバーだけは何としても逃がす覚悟だった。

そのために、セイバーを一旦地に降ろそうとして初めて、彼女は自分の背が軽くなっていることに気づいた。極度の緊張故に意識す

るまで感じ取れなかったのだ。

続いて、頭上にて巻き起こった膨大な魔力の奔流を察知し、舞刃だけでなくアサシンとアイリスフィールも、ハツと上を見上げる。

そこには、青の戦闘衣ドレスと白銀の鎧を纏ったセイバーの姿があった。さらにセイバーは黄金の聖剣をその手に顕現させ、インビジブル・エア”風王結界”を纏わせながら、空中よりアサシンへと斬りかかる。

「はあああッー!!」

「ギ、ギ ツ!?!」

予想だにしなかった反撃に動揺するアサシンは、がむしゃらに短ダ刀イクを投擲する。だが短刀ダイクはセイバー放出する魔力によって弾き飛ばされ、彼女に傷一つ付けることも叶わない。

そして、セイバーの振るう聖剣がアサシンを一撃の元に両断した。

「ギ……ア……」

断末魔の叫びを上げることなく、微かな呻きと共にアサシンは消滅していった。

だが、アサシンを文字通り瞬殺したセイバーもまた、苦しげな呻きを上げて膝を地に着けた。彼女の手は、傷を負った箇所である脇腹に添えられている。アサシンを倒したことで、令呪の効力によって無理矢理防がれていた傷が開いたのであった。

「セイバー!!」

そんなセイバーを見かねたアイリスフィールが彼女に駆け寄り、治療の魔術を施すも、焼け石に水であった。自分の無力さを痛感し、悲痛に歪めるアイリスフィール。

セイバーはそんな彼女の心境を察したのか、激痛に苛まれているにも関わらず、「気にすることは無い」というようにその顔に微笑みを浮かべる。

「大丈夫です、アイリスフィール。あなたの治療はしっかり効いています。この森を抜けるまでは保ちます。」

ですから先を急　　！！？」

不意にセイバーはアイリスフィールを庇うように立ち上がり、表情に緊迫を孕みながら不可視の剣を構える。セイバーのただならぬ様子を察した舞弥もまた、周囲を警戒する。

そして、薄暗い森の中に声が響いた。

”　　功を焦って綺礼どの言い付けを破り、拳げ句の果てには打ち取られるとは　　”

咎めるように告げられた呆れ入った様子の男の声。

”　　奴は我らハサンの中でも欲の深い男だった。致し方あるまい　　”

冷徹さを孕んだ鋭い女の声。

” 　　それだ、アイツのせいでボク達の存在がバレた訳だ
けど、どうするの？”

　　飄々とした幼さを感じさせる少年の声。

” 　　綺礼どのからは反撃を受けた場合の対処は仰せつかつ
ておらぬ。ならば、防衛の延長で殺してしまっても……仕方無し

”

　　深い重みのある厳めしい老人の声。

” ” ”

　　仕方無し、仕方無し

” ” ”

　　森に響き渡る幾つもの声。声。声。

　　あまりにも信じ難い事象にセイバー達は息を呑み、表情を驚愕に
染めることしか出来ない。

” 　　森のアサシンに徴集を掛けました。いずれ全てのハサ
ンがこの場集うでしょう。

　　さて、セイバー。手負いの身で足手まといを抱えながら、どこま
で我らと戦い得るか……見せてもらいましょう”

”

第十夜・アインツベルンの森の死闘・（後書き）

後書き

さて、本編の内容について説明と謝罪を一つずつ。

結構、東洋の英霊は召喚出来ないことを気にする人が多いようですが、あくまで裏設定みたいなものですし、原作内では書かれていなかった上に佐々木小次郎に対しても特に疑問に思っている人は原作内でいなかった筈。あれがメディアの反則だって全員が最初から知っていたなら別ですけど……。

だからこの小説では基本は西洋系しか呼べない、だけど触媒や何らかのチート行為（例としてメディアの小次郎召喚、臓硯のハサン召喚、アインツベルンのヘラクレスを聖杯戦争開始九年も前に召喚など）を使えばその他も呼べるという設定にしておきます。

そして謝罪の方ですが、前の話から作品内の時間が全く進んでいません。本当にごめんなさい。でも、捨て駒なハサンの見せ場が欲しかったです。ご容赦下さい。

ん？セイバー？

原作通りくニヤ

感想・批評お待ちしております

第十一夜・約束されし勝利

正面よりアインツベルン城に乗り込んだ綺礼と士郎。だが彼らは、迂闊にそれ以上は進もうとはしなかった。綺礼がじっくりと見分するようにはホールを見渡す。そして自分達の方に向けられたカメラを、まるでその奥にいる人物を見据えるかのように、ジッと眺めていた。だがそれは、時間としては数秒程。綺礼はカメラから目を切り、士郎の方へと向き直る。

「……士郎、このホールの罠は？」

「えーっと、……ホールの四隅にクレイモア対人地雷。ワイヤーがないからリモコン操作による遠隔起動タイプかな」

「規模はどの程度だ？」

「あー……たぶん、構造からして種類はM18A1クレイモアだから、最大加害距離は250m、加害角度は60°・18°・18°、一つにつき七百の鉄球が一斉に炸裂する。」

「……結論から言うと、これはホールの中心で喰らっちゃったただじゃ済まないな」

予め聖杯戦争に参加するに当たって、士郎は綺礼より念の為此の手の近代化学兵器について徹底的に知識を得るように言い付けられていた。故に、綺礼の問いにも正確かつ素早く返答することができた。

「ふむ……ならば、強行突破だな」

士郎の説明を受けた綺礼は、おもむろに呟いた。その呟きに士郎が言葉を返す間もなく、綺礼は左手を目にも止まらぬ速さで振るい、同時に右手で士郎の僧衣の襟を掴んだ。

振るわれた左手からは綺礼が好んで使う武器である、銀色の刀身を持つ十字架型の剣

”黒鍵”が投擲されており、仕掛けられていたカメラへと一直線に向かい、見事に直撃して粉碎した。

瞬間、綺礼は大理石の床を鍛え上げた鋼の如き剛脚で踏みしめ、ホールを一直線に駆け抜けた。城に至る森の道中での疾走をも遙かに上回る、電光石火の駆動であった。

そして綺礼が正面の階段へ辿り着いたのにコンマ遅れて、綺礼の背後で兵器による破壊が撒き散らされる音が鳴り響いた。

「……上手くいったか」

綺礼の狙いは単純であった。

仕掛けられトラップが遠隔起動タイプであるならば、相手を実に殺すしうるタイミングで起動する必要がある。その為には、カメラという目の代わりはトラップに嵌めようとする側にとっては不可欠なものだ。

それが突然破壊されれば、カメラの向こう側にいる者は僅かに動揺し、隙を生じる。綺礼は、その僅かながらも絶対安全で隙を突いたのであった。

「しかし、危うかったな……」

見事に敵のトラップをやり過ぎた綺礼であったが、敵もさるものであった。カメラが破壊されてから瞬時に綺礼の意図を読み取り、タッチの差で遅れはしたが迷わずトラップを起動させた戦略眼は常

軌を逸しているといえる。綺礼はこれを以て城に潜む敵が衛宮切嗣である確信をますます深めていた。

「ぐっ……え……」

「む……」

そんな時、綺礼は右手から聞こえてきた呻き声を聞いた。そして失念していたと言わんばかりに目を見開き、掴んでいた土郎の僧衣の襟を手放した。

「うほっ……うほ、うほ」

「……無事か？」

「無事に見えるか！？ つーか、実行に移す前に一声掛けるくらいの配慮をしるよ！！」

漸く解放された土郎は、空気を求めて盛大に咳き込むと、少々の外れな言葉を掛けてきた実父へ突っかかる。

「だいたい、こんな危険な真似しなくても『解錠』の応用で地雷は無力化できたんだぞ」

「なに……？ 聞いていないぞ、土郎」

「言う前に親父が動いたからだろ？ ったく……」

口を尖らせて不満げに俯く土郎。

そんな土郎を見て若干満足げな様子の綺礼に、土郎の機嫌はますます

まず悪くなる一方であったが、反論したら余計にからかわれることを学んでいる土郎は、なんとかそれを心の内に溜め込む。そして今度、綺礼の独り酒に付き合っただけでやらないことを決意しつつ、綺礼に先を促すことにした。

「畏は俺に任せてくれ。親父は後からついて来といて、いずれやっ
て来る本人自らの襲撃を警戒して欲しい」

「了解だ」

「それじゃあ行くぞ」

先程までの渋面は何処へやら。
打って変わった澁刺とした声で、土郎は告げる。

「トレス 同調、オン 開始」

ホールから繋がる廊下を映しているモニターに現れた言峰綺礼らの姿を確認して、切嗣は己が必殺を期して設置したトラップをやり過ぎされたことを把握した。そのことに対して、切嗣は憤然たる思いを抱くことを否めないでいた。

切嗣の思惑では、ホールに設置したクレイモア対人地雷によって確実に言峰綺礼らを屠る心積もりであった。確実に屠れる筈であった。

敵の魔術師の拠点に正面から入り込んで来るような輩だ。畏に対する警戒を持ち合わせているとは思えなかった。

ましてや、ここは伝統的魔術一族のアインツベルンの拠点として周知されている城だ。そんな場所で魔術とは程遠い兵器のトラップなど、そもそも警戒のしようがないのだ。

だが、切嗣はホールで起こった事実。言峰綺礼が回避不可な罠から生き抜いたという事実を以て確信した。

言峰綺礼は、衛宮切嗣の聖杯戦争への介入を察知している。

有り得ないことではない。九年前、切嗣が純血の血統を誇るアインツベルンに婿養子として迎え入れられたことは、魔術師の界隈において少なからず話題に上ったものだ。その真意を、アインツベルンと同じ御三家である遠坂と間桐ならば見抜いていてもおかしくはない。

そして、言峰綺礼は遠坂時臣と裏で結託している疑いがある。な

らば、時臣よりそのことを知らされている可能性は十分に存在する。

流石に切嗣自身がセイバーのマスターとして参加しているという事実までは至られていないだろう。だが、衛宮切嗣という魔術師らしかぬ戦法を恥も外聞もなく使用する外道が、魔術師の戦祭たる聖杯戦争へ介入していることは気づかれていることは間違いないと切嗣は推察した。

カメラ越しに目が合い、さらにはわざわざカメラを破壊した時点で切嗣はそれを、ほぼ確信していた。尋常な魔術師ならば、カメラの存在など気にする筈もないからだ。

言峰綺礼は聖堂教会から移転した、有る意味異端であるといえる魔術師だ。

しかし、代行者などの教会の戦闘要員の主な敵は吸血鬼や魔術師である。そういう意味では、教会の連中も協会の魔術師同様に現代の利器や兵器に精通している見込みは薄い。

それにも関わらず、言峰綺礼が真つ先にカメラに目を付けるということは、切嗣の推察を裏付ける要因となりうる。

だがそれでも、切嗣に焦りはなかった。何故なら、次に言峰綺礼らが通過するのが廊下であるからだ。

ホールとは違って幅がなく縦に長い廊下では、先程言峰綺礼が使用したであろう切り抜け方は通用しない。今度こそ、奴らを葬ることができると切嗣はそう確信していた。

モニターの向こう側、何故かホールより入って来てから動く気配

のない言峰綺礼らを、トラップを動かっているのだろうと当たりを付けながら見守る。

そんな中、とうとう言峰綺礼らが動きを見せた。が、その行為に切嗣は疑問を覚える。

モニターの中では、士郎が先導し、少し距離を置きながら綺礼が士郎に続いていった。あくまで慎重さを欠かさないゆったりとした歩みで進んでいる。先程のホールでは真逆の行動。しかも、カメラを破壊しようとはしてこない。

加えて、士郎は何の意図を以てか、城の壁に手を添えながら歩いていた。

(畏を警戒しているつもりか……？ あんな方法で？)

解せない行為を遂行する言峰親子への疑問は晴れない。しかし切嗣は、そんな彼らの行為を好都合だと判断しつつ、トラップを起動させる機を図る。

(……まずは子供を仕留める。その後に、言峰綺礼を叩く)

壁伝いに進んでいる士郎は、全ての部屋の入り口に設置されている指向性爆弾で爆殺。目の前で息子が無惨に殺されて動揺する綺礼を、その隙を突いてトラップで仕留める。

切嗣が咄嗟に組み立てたプランだ。

(何のつもりでこんな所に息子を連れて来たか知らないが……。せいぜい利用させてもらう)

言峰綺礼らのいる廊下の反対側の壁の向こうは外だ。元”代行者”元綺礼ならばトラップに先んじて、壁を破り城外へ回避する恐れがあり得た。故に取った策である。

息子を目の前で殺されれば油断すると、切嗣は言峰綺礼の人格の欠落を見抜いていながらも、そう考えていた。それは、同じように年差のない娘を持つ父であるからだろうか。

自分の娘と変わらない少年を殺そうとする自分に嫌悪感を抱きつつ、切嗣はトラップを起動させた。

不発。

爆弾は起爆せず、言峰士郎は扉の前を無事に通過した。

「なに？」

一瞬、舞弥の設置ミスかと疑う切嗣であったが、彼女に限ってそれは有り得ないと断じる。そして切嗣は、不測の事態に対する困惑を振り払って別のトラップを起動させた。

不発。

「馬鹿な……何が起きている？」

この事態に嫌なものを感じた切嗣は、廊下に仕掛けられているトラップを全て起動させた。やはり、不発だった。

「……………」

頻発する不可解な事態。されど切嗣は、焦ることなく新たなトラップを起動させた。

直後、切嗣は轟音と共に城全体が揺れるのを感じ取った。

新たなトラップ　　言峰綺礼らのいる廊下とは離れた所に設置されたトラップは、無事に起動した。
そしてこれを以て、切嗣は敵の手を看破した

「成る程。『分解』……いや、『解体』の魔術か」

『解体』

『構造把握』の派生である『解錠』をさらに応用、発展させた魔術。”魔術使い”である切嗣も、主に紛争地域に介入して戦っていた時によく使用していた魔術だ。

（参ったな。どうやら思った以上に”魔術師殺し”の対策は万全らしい）

敵側の周到な手口に、心の中で軽く愚痴をこぼす切嗣。

解体魔術とは機械において本領を発揮する魔術である。故に、現代技術の賜物である電子機器や質量兵器を忌避する風潮のある魔術師の間では、オーソドックスである『構造把握』の派生でありながらマイナーとされている魔術だ。

そんなものを、この城のトラップ群を攻略するためだけにわざわざ

ざ修得して来たのだとしたら大したものだ。と、切嗣は半ば呆れを交えながら思う。

（畏では仕留め切れない……そうなるよ）

「僕自らが打つてでるか、素直に拠点こてんを放棄するか」

言峰綺礼らの相手をする事なく城から離脱し、先に脱出した舞弥達と合流するのみの一つの選択肢ではあった。

だがこれを選ぶことは叶わない。何故なら、切嗣は経路パスを通して己のサーヴァントが敵サーヴァントと戦闘の最中にあり、しかもその旗色が芳しくないのを感じ取っているためだ。

そんな中に、切嗣が加勢に加わったところで状況が好転する要素は皆無だ。

ならば、切嗣に出来ることは一つしかない。

一刻も早く言峰綺礼マスターを殺す。

切嗣の本能が『危険』であると判断する言峰綺礼との対峙は、彼にとっては難としても回避したいものであった。しかも相手の方から、まるで切嗣の存在を見透かしているかのように襲い掛かって来ることに、恐怖心を抱くことを切嗣は否めなかった。

もしも、彼の側にアイリスフィールがいたら泣き言の一つでも漏らしていたかもしれない。

だが、切嗣は今一人だ。

そして衛宮切嗣は、一人である方が強くあることのできる装置

致命的に壊れてしまえる人間だ。

今の切嗣は、恐怖心に限らぬ全ての感情を封殺し、ただ一つの衛宮切嗣として十全に機能する事が出来る。

「……………」

切嗣は無言でノートパソコンを閉じて席を立ち、サロンの出口へと歩き出す。必要最低限の武器の装備は完了していた。

後は、目的を果たすまで……………聖杯を手に入れるまで、止まることなく殺戮き続けるだけ

「ム」

言峰綺礼が何かを察知したのは、ちょうど先に行く土郎があと少しで三度目の廊下を折り曲がるうとした時だった。土郎はトラップの解析と解体に集中しているためか、気づいていない。

「止まれ、士郎」

「へ？」

綺礼は声を掛けた時には既に走り出しており、士郎へと接近し、ホールでしたように右手で僧衣の襟を掴み自分の背中へと隠す。左腕は、頭部を守るようにして顔の前に持っていく。

と同時に、突如廊下の曲がり角よりよれたコートに身を包む男

衛宮切嗣が躍り出た。そして次の瞬間には彼の右手に握られていたキャレコが火を噴き、綺礼へと毎分七百発の弾丸が襲い掛かる。

殺気も、足音も、存在感すらも消し去った完璧なる奇襲であった。これに綺礼が対応出来たのは、ひとえに代行者としての尋常ならざる経験故だろう。

だが、そんな綺礼を以てしても襲い来る弾丸の群れを避けることは叶わない。幾つもの弾丸は余すことなく綺礼の総身へと突き刺さる。しかし、それまでだ。

弾丸は綺礼の肉体どころか彼の纏う僧衣さえも貫くことすら出来ず、やがて勢いを失い、重力に従って地に堕ちていく。

弾丸は、特殊繊維の僧衣の施された護符と綺礼自身の極限まで研磨された肉体の頑強さが相俟った防御力の前に、一切のダメージを与えないことなく完全に無力化された。

だが切嗣は銃が効かないと見るや、懐より手榴弾を取り出し、素

早くピンを抜いて放り捨てると、曲がり角を戻って自分の身を隠した。

流石の綺礼も、爆発を直接食らうのはマズいと判断し、後方へと跳び退る。

その直後に手榴弾は爆発。

爆発は廊下という狭い空間でうねるように広がり、煌びやかな装飾を無惨に吹き飛ばした。爆発と破壊による硝煙と粉塵が廊下一面を埋め尽くしていた。

幸いにも爆発から逃れた綺礼であったが、一寸先すらも見通せない最悪の視界状況に置かれてしまい、迂闊に動くことは出来ない。それでも、目が駄目ならばと、聴覚と皮膚感覚を高めて切嗣の動きに対して注意を払う。

そして、再び銃撃の音が響き渡り、綺礼は銃弾の嵐にさらされた。綺礼はまたも防御に徹することを強いられる。切嗣にとっても視界は不良であるためか、先程よりも狙いは粗雑ではあった。それでも下手に避ければ背後の士郎が危険であると判断し、綺礼は不動のままに銃撃を耐え続けた。

だが、綺礼もやられてばかりではない。弾幕が止んだ瞬間、視界が未だに晴れないながらも、銃弾の飛んできた方向から切嗣の位置を推測し、黒鍵を四本投擲した。

（ 当たった……いや、掠ったか ）

己の投じた反撃に手応えを感じ取った綺礼は、床を思い切り踏み

しめ、頭を両腕でガードした状態で煙の中へと呐喊する。廊下半分に値する距離を、綺礼は一瞬で馳せた。

そして、暗き硝煙の幕を超えた先にて
綺礼は右の肩口から血を流す男と目が合う。

この視線の交錯が、言峰綺礼にとって念願であった男
衛
宮切嗣との初コンタクト。

互いに命を削り合う戦場にての邂逅であった。

ほの暗い森に、剣と剣のぶつかり合う、刹那の金属音が響く。ア
サシンの投じた短剣^{ダーク}を、セイバーの剣が弾き返す音だ。その残響は、

彼らが戦闘を開始してから、既に少なくとも百を超えて繰り返されていた。

つまり、アサシンの放つ攻撃は全て余すことなくセイバーによって防がれていた。だが、セイバーに守られるようにして戦況を見守るアイリスフィールらは、現在セイバーが圧倒的に不利な状況に立たされていることが理解できた。

その証拠に、セイバーの呼吸は激しく乱れ、その足下には彼女自身の出血により赤い水溜まりが作られていた。

「はあ…はあ…はあ……………くっ」

そんな満身創痍のセイバーに反して、アサシンの群は初めに殺された奴を除いて一人も欠けることなく健在であった。

これは、アサシンが只管狙いをアイリスフィールらに絞った戦術を取っているが故だ。攻撃の来る方向が一定ならば兎も角、アサシンの”妄想幻想”^{ザバーニヤ}による数のアドバンテージを生かした全方位からの徹底した狙いには、さしものセイバーも防御に専念するしかなく、反撃の糸口を掴めないでいた。

フェイカーの”軍神五兵”^{ゴッドフォース}による傷が塞がりきっていないことも苦戦を強いられている要因の一つだ。現在の状態のセイバーに長期戦は望めない。

アサシンも、それを見越してこの戦術を取っていた。その成果は絶大であり、セイバーはまさに活殺自在の状況に置かれていた。

それでも、アサシンの群はセイバー自体を狙おうとはしない。

彼らが本気で殺しにかかるのは、絶対的な必殺が約束された時のみであるからだ。

セイバーの体力が尽き、剣先を地に向けて膝を地に着けた時
その瞬間こそが、彼らがセイバーを仕留めに掛かる刻だ。

そして、その時は迫っていた。

「ぐあっ」

「セイバーっ!!」

セイバーはアイリスフィールらを彼女達を狙う五本の短剣から守ろうと前に立ったが、内一つを弾き損なってしまった。

結果、短剣はセイバーの右上腕部を抉り、突き刺さった。アサシンに直接負わされた初めての傷となった。

アサシンの群はこれを好機と見るや、攻撃の間隔を急激に加速させた。そしてただの一撃を皮切りに、次々と堅固であったセイバーの防御を掻い潜り、短剣を命中させる。

「ぐう」

「はああああッ!!」

セイバーも袋叩きの状況に屈することなく、渾身の力を振り絞って迎撃するも、やがて急所を防ぐことで手一杯となる。

アサシンの短剣は鎧のない箇所を正確に狙いを付けて投擲されていたため、威力の低い攻撃でも気を抜くことは出来なかったため、精神的にも肉体的にも刻々と削られていた。

そして遂に、限界が訪れる。

セイバーの剣を振るう腕が、力無く下ろされた。そのまま彼女はゆっくりと背中から倒れ、背後で守られていたアイリスフィールに抱き留められる。

アイリスフィールは地に塗れるセイバーを、自分が汚れることを厭わず力強く受け止めて、必死に治療魔術を施す。

「セイバーっ！　しっかりして、セイバー！！」

しかしアイリスフィールの懸命な処置も効果は薄く、セイバーは彼女の呼びかけにも答えない。

打ち寄せる絶望を抑えつけるように、アイリスフィールは自分の胸を掻き抱く。

ふと、その行為をきっかけにアイリスフィールは、自身の身に秘められている一縷の希望へと思い至った。

「マダム！」

自分と呼ぶ焦燥を帯びた声に、アイリスフィールはハッと顔を上げる。そこには、鉄面皮を苦渋の表情に歪めながら銃を構える舞弥の姿があった。

そして気付く。いつの間にか、決して姿を見せることのなかったアサシンが、森の茂みから次々と姿を現わしていた。その中の代表格である女性のアサシンが、アイリスフィールらに向けて口を開く。

「さて……セイバーは倒れました。貴女方の敗北です。出来れば抵抗無く我らに従って欲しい。我が主からは捕縛の任を承っている故……」

脅しというよりは説得するような柔らかな口調で女アサシンは話す。だが、滲み出ている殺気と、包囲するように取り囲んでいる状況が台無しにしている。

「……………」

「……………そうですか」

無言で銃を強く握り直す舞弥を見て、女アサシンは嘆くように呟いた。

「仕方ありません。多少、手荒な真似を取るしかないようですね。傷付けるな、とは命じられておりませんので致し方ないでしょう」

女アサシンはスツと右腕を上げる。

それが合図となったのか、他のアサシン達が一斉にアイリスフィールらへと襲い掛かる。

ここまでか、と舞弥が心の内で諦めかけた

その時、

「その汚れた手でアイリスフィールに触れるな、外道」

舞弥の背後より、黄金の輝きと共に力強い言葉が宣告された。その凜とした声音は、名にしおう、騎士王アルトリア「ペンドラゴン」のものに相違なかった。予想外の事態にアサシン達は戦^{おの}き、黄金の輝きを放つセイバーから逃げるように後退る。

しかし、彼らは既に彼女の間合いを深く侵していた。

「
”風王鉄槌”ストライク・エア ツツ!!!」

騎士王の咆吼と同時に、彼女は不可視の剣を天空へと突き立てるように掲げる。

瞬間、彼女を中心にして大気が爆ぜた。

黄金の剣の輝きを覆い隠していた超圧縮された気圧の鞘を、彼女の周囲に向けて解き放ったのだ。

それは、さながら局地的な台風の如く荒れ狂い、セイバーの周囲

斬撃を受け

絶命した。

瞬く間に行われた殲滅戦に、半ば諦めかけていた舞弥は瞠目する。そして彼女の視線は自然と、未だ眩い黄金の輝きを放つセイバーに。正確にはセイバーが左腕に抱く物体へと向けられた。舞弥はその物体に心当たりがあった。

「あれは……………」

「アウァロン 全て遠き理想郷”。

持ち主の傷を癒し、老化を停滞させるエクスカリバー聖剣の鞘……………どうやらその力は本物だったようね」

「マダム、しかしあれは……………」

舞弥の背後からそっと忍び寄るように彼女へ近づきながら、舞弥の推測を肯定するように告げたアイリスフィールへ、舞弥は若干非難がましい視線を送る。

そんな舞弥の眼差しに対して、アイリスフィールは苦笑いを浮かべながらも、はっきりと告げた。

「確かに切嗣の言い付けには反するけれど、”アウァロン 全て遠き理想郷”のことを隠していても仕方のない状況だったわ。ああするしか、起死回生の方法は無かった……………」。

いえ、今はやってしまった事を話している場合ではないわ」

アイリスフィールはゆっくりと頭を横に振ると、突き刺さった短剣ダを抜き取るのに苦心しているセイバーを見やり、声をかける。

「セイバー」

「くっ……この……あ、はい、どうしましたか。アイリスフィール」

「頼みがあるわ　切嗣を助けに行ってあげて。彼は今、城でアサシンのマスターと戦っているの。」

「……考え得る限り最悪の敵だわ。切嗣一人で戦わしていい相手じゃない、お願い出来るかしら」

「切嗣が……了解しました。今すぐ彼の助太刀へ参ります。……それと、これを預かっていて下さい。話しは後で聞かせていただきます。」

セイバーは即座に答えを返すと、アイリスフィールへと聖剣の鞘を手渡した。そして、踵の返して城へ向けて駆け出した。

アイリスフィールは聖剣の鞘を胸に抱きながら、セイバーの去って行く方向を、不安と心配から瞳を陰らせてジッと見つめた。

「マダム……切嗣が現在交戦中なのは、やはり……」

「ええ。私たちが襲ってきたのがアサシンだった。」

「なら、切嗣が戦っているのは、アサシンのマスターである、切嗣が『危険』だと評価した男　　言峰綺礼」

アイリスフィールは声を強張らせなが、その者の名を告げた。

「無事できて……切嗣」

最愛の人の無事を祈ること。
それだけがアイリスフィールに許される精一杯であった。

第十一夜・約束されし勝利 - (後書き)

後書き

だいぶ遅くなってすみませんでした。

一応十二月の分として投稿しておきます。

話の方は、今回で綺礼と切嗣のバトルまで終わらせるつもりでしたが、キリ良く一万文字だったのでアサシン戦までにしました。

士郎の使った魔術は独自設定ですが、解錠があるなら解体ぐらいあってもいいかなと。

後、私はミリタリー系の知識には疎いので切嗣の戦闘面で不自然な所があったら申し訳ないです。

セイバーに関しては、感想の方で結構な人数の方が既にアヴァロンを予想していたので少し味気なかったですね。

話は変わりますが、アニメの十話がもし凜と龍ちゃんが絡むならいろいろ被っちまうなあ。

次回、「激闘、決着」

感想・批評お待ちしております

第十二夜・激闘、決着・（前書き）

今回は綺礼vs切嗣オンリーなので短めです。

肝心の中身は、プロローグ（原作一巻）が終わったばかりで、ストーリーとしては序の序にも関わらず原作のラストバトル並みの死闘に仕上がってしまった。

どうしてこうなった………

それと、今更ですがこの小説の第四次聖杯戦争は1990年に起こっている設定です。

第十二夜・激闘、決着・

言峰綺礼は生まれながらの異端であった。

どんな理念をも崇高とは思えず、どんな探求にも快樂を見いだせず、どんな娯楽にも安息を得ることはない
即ち、目的意識を持たない欠落者だ。

それどころか、普通の人間が嫌悪するものこそを美しいと感じ、美しいとされるものこそを嫌悪するという酷く歪んだ価値観を持っている。今は己の理性が、自分の兼ね備える道徳と常識を以てその価値観を否定し、心の奥底に覆い隠して気付かない振りをしているが故に、綺礼は己の埋めることの出来ない心の欠落に対して葛藤し続けていた。

そして綺礼は、己の欠落を埋めるに足るものを得る為に、若い頃から神の導きによる救いを求めて熱心な信仰に行じた。だがそれでも得る物はなく、自身が神の愛を以てしても救いような人間だと悟った綺礼は、そんな自身に対する怒りと絶望から自虐にも等しい修練に没頭した。

その果てには代行者というエリートに僅か十代で到達までもしたが、それでもやはり得るものは無かった。

別な欠落を埋める手段として、生涯唯一愛した女性と結婚し子を為しもした。だがそれも、結局は己の欠落を埋めるに足るものでは無かった。

この時為した子には、妻とは違い愛情も何も抱かなかったが故、この時は特に関わろうとはせず放置していた。

その後、時を経て三年。

己の右手の甲に現れた謎の聖痕の事を、同じ第八秘蹟会に所属しながらも中々会う機会が無かった父に相談し、遠坂時臣という魔術師との会談を設けられた時だった。父、言峰璃正により連れられて来た自分の息子だという少年と再開を果たしたのは。

そして、その少年の目を見た時　　総身が震えた。

その目は、自分もよく知る……否、自分だからこそよく知る眼差しであった。

あらゆる物事に興味を抱く幼少期の子供に似つかわしく無い、虚無の瞳だった。

時臣との会談を終えるやいなや、綺礼は少年を連れて丘の頂から続く九十九折りの細道を麓へ向けて歩いていった。しかし両者の間には一切の会話は無く、ただ黙然と歩みを進め続けた。

ついに麓まで辿り着いたところで、両者は足を止めた。

そして両者の間に沈黙が広がる。

その沈黙を先に破ったのは綺礼の方だった。

「……名は何だったか」

「……言峰士郎です。父上」

「そうか……士郎、少し質問をしていいか」

「……………」

綺礼は士郎の沈黙を肯定と受け取った。

「今まで何かを楽しいと感じたことはあるか？」

「……………」
「ありません」

「今まで何かに喜びを感じたことはあるか？」

「……………」
「ありません」

「今まで幸福を……………」
「感じたことはあるか？」

「……………」
「ありません」

「そうか……………」

その応答を最後に、再び沈黙が空間を支配した。
そして次にその沈黙を破ったのは、綺礼でなく士郎だった。

「……………」
「此方からも質問を宜しいでしょうか、父上」

「……………」
「ああ」

「……………」
「貴方も、私と同じですか？」

「……………」
「ああ。私も、お前と同類だ」

こうして綺礼は、初めて自分を理解してくれる存在と出会った。

それは自分の息子であり

自分と同類の人間であった。

だが、士郎はこの後僅か一年で自身の欠落に対する”答え”を

内なる空虚を埋めるに足るものを得ることになる。

しかも皮肉なことに、士郎がソレを得るきっかけを作ったのは綺礼本人であった。

しかし、綺礼はその事を以て確信を得た。

綺礼の飢えと喪失に対する”答え”を与えてくれるのは、神などでは無く、己と同類の存在に他ならないと。

士郎は違った。

だが綺礼は、衛宮切嗣という破滅的な闘争に自ら身を投じる存在を知ることになる。衛宮切嗣の虚無で無価値な闘争は、綺礼の自身に対する怒りと絶望による苛烈な修行という名の自傷行為に、何処か通じるものを綺礼は感じた。

そして、そんな己と同類とらしい男が聖杯戦争に参加すると聞いた時、綺礼は運命を感じられずには得られなかった。

綺礼はこの男と出逢う為だけに、自身が聖杯戦争の参加者として選ばれたのだと、錯覚した。

故に、

問わねばなるまい。

破滅の闘争に何を求め、果てに何を得たのか

煙幕を抜け、晴れた視界の中に立つ男。

その男と交える視線の先に、凡そ常人のものとは思えない虚ろなる瞳を捉えた綺礼は、この男こそが衛宮切嗣であることを確信した。

今すぐにも、目前に立ちふさがる切嗣に心に秘めてきた問いを投げ掛けたい衝動に駆られる綺礼。

だが、昂ぶる感情とは裏腹に冷静に働いている思考は、その行為が如何に愚行であるかを理解していた。

敵の拠点にて侵略者と迎撃者として相對した以上、先ず言葉より交わされるのは殺意に満ちた銃弾と拳であるのは自明の理だ。其処に對話の余地など有りはしない。

ならば綺礼の為すべきことは、衛宮切嗣の抵抗力を完膚なきまでに削ぎ落とし、完全なる戦闘不能状態とすること。優先すべき事態を考慮しながら、綺礼は巖の如き剛拳を振るう。

狙いは切嗣の左肩。

今までの攻防から切嗣の主力は魔術よりも現代兵器に傾倒していると綺礼は推察した。故に、右肩は既に黒鍵により傷を負わしているので、左肩も潰せば最早銃を自由に扱う事は出来ず、切嗣は主と

なる攻撃手段を失う事となるからだ。

そして、岩をも砕かん勢いで振るわれた拳は寸分変わらず、切嗣の左肩へと一直線に吸い込まれていき

「
速
1！」
固有時
Time
制御
alter・double
二倍
acce

インパクトの寸前、綺礼の視界より切嗣の姿が消失する。

綺礼の剛拳は、打ち据える筈だった相手に当たることなく空を切り、城壁を粉碎するに終わった。

（かわされた　　！！）

綺礼の胸中に驚愕が広がる。

拳打のタイミングは完璧であった。

が、それはあくまで切嗣の動作速度が並であった時の話しだ。

今の切嗣は、大魔術に分類される時間操作の一つである時間の調整を、術者自身の肉体に範囲を限定して行使することで、効率的に発動する事出来る彼の我流魔術　『固有時制御』によって、自身の動作速度を二倍にしていた。

故に、並の速度を想定して放たれた綺礼の拳が切嗣を捕えられな

いのも道理である。

ならば、綺礼は切嗣が二倍の速度で移動すると想定して対応すればいい。彼には、それが可能であった。

その証左に綺礼は、視界の端にて腰の鞘よりサバイバルナイフを引き抜きながら彼の死角に潜り込もうとする切嗣の姿を、ギリギリで捉えていた。

そして死角を衝いて放たれたナイフの一撃を、綺礼は視認するまでもなく左手で防ぎ、受け流す。

さらに積年の功夫により会得した『聴頸』により、綺礼の腕と切嗣の腕が交錯した一瞬を以て、綺礼は切嗣の動作を目に見えているが如く読みとる。

すかさず轉身。

再び切嗣の左肩に狙いを定めた剛拳を撃ち放つ。

しかし、綺礼が必中を思い放った第二撃は、切嗣の右手に握られたキャレコに阻まれ、直撃には至らなかった。

だが、手榴弾の爆発にも劣らない拳撃は、たかが拳銃一丁で威力を殺し切れる筈がない。キャレコを盾にすることで左肩への直撃を免れながらも、切嗣は敢えなく衝撃に耐えられずに、破壊されたキャレコの撒き散らす残骸と共に吹き飛ばれ、廊下を凄まじい勢いで転がって行く。

(……………右肩の傷は自由が効く程度のもだったか)

攻撃を当てた喜びも、間一髪で直撃を防がれた悲嘆も無く。

綺礼は、ただ冷静に結果を分析するだけであった。

廊下の端。大理石の壁に強かに身を打ち付けられることで切嗣の回転はやっと停止した。そして、壁への衝突に軋む自身の肉体に鞭を打って何とか切嗣は立ち上がり、目の前の綺礼を見据えながら、身体の状態を確認する。

（左肩は無事……とはいかないか。少なくとも罅は入っているな。だが無理をすれば動かせないこともない。即席の治療魔術を施した右肩も同様、か）

決して芳しくはない状況。

されど切嗣は、表情を諦観に沈ませることも、苦渋に歪ませることもない。浮かび上がるのは純然たる殺意によって塗り固められた”無”の表情のみ。

あくまで表層に出すのは”殺す意志”だけだ。殺気を振り撒くような三流の真似は犯さない。

そして切嗣の思考は、先程の攻防に移っていく。

（死角を衝いたにも関わらず、完璧に防がれた。つまり、奴は二倍速を初見で見切った……厄介だな。

さらにキャレコが壊された今、僕の手持ちは二本のサイバルナイフに閃光弾と手榴弾。そしてコンテNDERだけか）

切嗣は上方修正した言峰綺礼の戦闘技術と己の持つ戦闘手段を元に、冷静に彼我の戦力を推し量る。そして如何にしてこの強敵を打倒するかに思考を張り巡らす。

(……よし)

「固有時 Time 制御 alter・二倍 double 速 accel」

再び体内時間を加速させた切嗣は、彼の動きを伺っていた綺礼へと猛然と接近しつつ、加速の勢いを乗せて右腰から抜いたナイフをスローイングする。

銃弾の速度にも劣らない速さを以て投擲されたナイフ。だがそれは、先程の攻防と同様に綺礼の卓越した技術により地へと叩き落とされる。そして尚も、もう一本のナイフを片手に接近する切嗣を目掛けて、綺礼から反撃の剛脚が放たれた。

しかし、

「解除 Release 固有時 Time 制御 alter・二重 double
停滞 Stagnate」

(……！？ 遅く………！！)

高速で迫る切嗣の速さを見越して放たれた蹴撃は、寸前に切嗣の速度が急停滞したことにより、切嗣の身に届くことなく再び空を切った。その空振りは、綺礼に致命的なまでの隙を生み出す。

そして、切嗣はその隙を決して見逃すことなく、勝負に出た。

「
Time 固有時 alter 制御・Tripl 三倍 accel!!」
速

三倍速の領域。

一切の躊躇なく、切嗣はその禁断の領域へと踏み入った。

『固有時制御』は体内時間を操作する性質上、体外時間との時間流にズレが発生する。そして術の解除と同時にズレへの修正力が働くのだ。修正力とは、即ち体内時間の加速や遅滞に対する反動であり、肉体へと多大なる負荷が生じる。

故に、肉体への負荷によるダメージを考慮した場合、二倍速までが切嗣に許された限界点だ。三倍速にまで手を出した暁には、ただじゃ済まない反動として切嗣の肉体に帰って来る。

つまり、切嗣はこの刹那の一撃に全てを賭けたのだ。

純粋な身体能力に関して次元の違う言峰綺礼を殺し得る策として、自分自身も死に瀕しかねない禁呪を使う事を、切嗣は厭う事無く是とした。

そして切嗣の命懸けを以てナイフを一閃する。

それは、綺礼の認識出来る速度の限界をも僅かに越えて、綺礼の首へ一直線に振るわれた。

最早その一撃を避けることは到底叶わず、絶体絶命の状況に陥った綺礼。

だが、綺礼は今死ぬ訳にはいかなかった。
念願の相手を前にして、目的を果たすこと無く死ぬこと等、許せる筈も無かった。

そんな生への執着が、綺礼の身体を突き動かした。

「ぬう　　ッ!!」

(何っ……………!?)

鮮血が舞う。

切嗣の命懸けの一撃は、確かに綺礼の身を切り裂いた。

だが、その命を奪うには至らなかった。

生への渴望が生み出した驚異的な綺礼の反射によって、ナイフの軌道の間差し込まれた彼の左腕が、綺礼の命をギリギリの所で救うこととなった。

しかしその代償は大きい。

命を護った代わりに、綺礼の左腕の肘から先は、彼の腕より噴き出す血と共に宙を舞っていた。

それでも綺礼は、左腕を切断された痛みにも自身の肉体の一部の喪失にも表情を一切歪めることなく、残った右腕に渾身の力を込めて全身全霊の剛拳を放つ。

その拳撃は今までの、あくまで切嗣の戦力能力を奪う目的で放たれたものとは違った。死に直結する一撃に晒された綺礼の頭からは、

最早そのような姑息な計略は失せており、その拳撃は確かに切嗣の心臓を目掛けて放たれていた。

切嗣も必殺を期した一撃であったとはいえ、防がれた場合を考え
ていなかった訳ではない。むしろ、言峰綺礼ならばこの攻撃を防い
でしまっただろうという直感があった。

そして実際に化物じみた反応によって一命を取り留めた綺礼に、
切嗣は改めて言峰綺礼の恐ろしさを実感した。

それ故、生半可な攻撃は無駄であると判断した切嗣は、空いた左
手で瞬時に懐より、己の最も信頼する得物である愛銃「コンテナー」を取り出す。

そして既に銃弾を装填済みのコンテナーの銃口を、三倍速の振
り戻しによる激痛に悲鳴を上げる肉体を酷使しながら、綺礼の頭蓋
へと照準し、引き金に手を掛ける。

交錯する切嗣の銃と綺礼の拳。

（ 殺った!!! ）

必殺の確信と共に

死の撃鉄が落とされた。

第十二夜 - 激闘、決着 - (後書き)

次回、「月下狂吼」

感想お待ちしております。

第十三夜・月下狂吼

冬であることを忘れさせるような陽気な日差しを生み出している
昼の太陽の下に、とある建物を見上げる一人の男がいた。

男の格好は黒のワイシャツに、同じく黒のジーンズというものだ。
それ自体は可笑しい格好でもないが、その男自身の風貌は変わった
ものであった。

色素が抜け落ちたかのような白髪に、服装と相成る黒い肌。外国
人居住者の多い冬木市においても、なかなかお目にかかることな
い容姿をしていた。

そんな彼の正体は、現在冬木市にて密に行われている聖杯戦争
に”フェイカー”のサーヴァントとして参加している男 英
霊エミヤである。

そして彼が見上げていた建物が、彼のマスターである魔術師
ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが聖杯戦争の拠点として
利用している冬木ハイアット・ホテルだ。

否、利用していたというのが正確だろう。

ケイネスは、既にこの拠点を放棄していた。放棄せざるを得なかった。苦勞して魔術要塞と改築させた拠点を、わざわざ放棄せざるを得ない程のことが起きたのだ。

拠点を放棄するに到ったその出来事は昨夜。
正確には今日の深夜に発生した。

フェイカーは瞼を閉じ、その事件を記憶の残滓より引き起こした。

.....

.....

.....

倉庫街の戦闘に関する反省と、今後の方針の打ち合わせを終了させたケイネスは、フェイカーに敵襲に備えた見張りを命じると、ソラウと共に眠りについた。

命令を受けたフェイカーは、冬木に到着した日にしたように屋上から敵の使い魔やら奇襲やらを警戒していた。
しかしフェイカーはふと、自分が立つホテルの状態に違和感を感じ取った。

(静かすぎる……?)

そう。ホテルからは異常をまでの静けさが漂っていた。深夜だから宿泊客が既に寝静まっているからという訳ではない。

気配が、感じられなかった。

無くてはならない、人が生きている気配が消えていた。

「ッー!!」

この異常に不吉なものを感じ取ったフェイカーは、実体化を解いて霊体と化しホテルの中へと戻る。そして、ケイネスの眠る部屋にて再び実体を結んだ。

「マスター」

「む……。貴様が、フェイカー」

フェイカーが部屋へと戻った時には、眠っていた筈のケイネスはソラウと共に起床して、服まで着替えていた。その服装は、ケイネスが魔術師として戦う時に身に纏う正装であった。

それは即ち、ケイネスが戦闘体勢であること意味し、さらに、今現在何らかの脅威がケイネス達に迫っていることを意味した。

「……何があった、マスター」

「ホテルの最上階フロア全体に敷いている対魔術防御結界に反応が

あった。この階への侵入者の反応はないが、何らかの魔術にこのホテルが晒されているのは間違い無い。

フェイカー、貴様は下の階を確認してこい。私は魔術の出所を探る」

「了解した、マスター」

ケイネスの命令を承ったフェイカーは再び霊体化した。

そして先ずは直ぐ下の階の様子を確認しようとし、三十一階へと降りた。

瞬間、

「ぐ　　っ!？」

激しい脱力感がフェイカーを襲う。

それは、フェイカーの魔力を強引に根こそぎ奪い取るうとするかのようなものであった。

(　　……まずい)

たまらずフェイカーは肉体を実体化させた。

同時に、フェイカーを襲っていた脱力感が随分と軽減される。

彼が身に付けている赤い外套の御陰だ。
フェイカーの外套は聖人の聖骸布で作られており、外界に対する守りとして一級品の概念武装である。

故に、ホテルで発動している魔術が攻性の低い干渉型魔術であったことも相成つてその効力を存分に発揮し、フェイカーを魔術の影響から守っていた。

「ふう……」

脱力感より齎もたらされる重苦しい束縛から解放され、思わず一息吐くフェイカー。

だが聖骸布の守りを得ても未だに感じる魔力の喪失から、己が敵の術中の最中にあることを認識し、気を引き締めた。

そして自分がどのような魔術に晒されているかを思考する。

「魔力を奪う魔術か……？」

まさかっ!？」

ある可能性に思い至ったフェイカー。
血相を変え、手近な部屋へと、施錠されたドアを蹴破り侵入する。そして彼は一直線に部屋に備えられているベッドへ歩み寄る。

フェイカーは見た。

ベッドでは安らかな表情で眠る少女が居る。

両隣りでは彼女の両親であろう男性と女性が少女を挟むように、同じく安らかに眠っている。少女は両親の寝間着をそれぞれ強く握り締めており、両親はそんな少女の手を両手で優しく包み込んでいる。

その様子から仲睦まじい家族であるうことがありありと想像がたく彼らは、

眠るように、死んでいた。

魂なにかみの無い、物言わぬ死体ものへと成り下がっていた。

「ッ」

自分の最悪の想像が当たってしまったことに齒噛みするフェイカ。

彼の思い至った魔術とは、“生命力の強奪”であった。

生命力とは第二、第三要素である精神と魂の事であり、即ち魔力の源だ。そして魔力はサーヴァントの存在を維持するのに必要不可欠な要素である。それは多量の魔力によってサーヴァントの存在を補強出来ることを意味する。

つまり、この魔術はサーヴァントによる“魂喰い”を目的にしているに相違なかった。

しかも、ケイネスの結界の直ぐ真下の階でこの状況だ。

既にホテルを利用していたであろう客の全ての魂が喰われているであろう事は想像だに難く無い。

「……………やってくる」

さらにフェイカーは、この魔術が自陣へと齎す更なる効果を見抜いた。

それが魔術を仕掛けた敵の本来の狙いか、それとも副次的なものなのかまではフェイカーにも定かではない。

それでも確かなのは、後手に回ってしまった時点で自分達が不利な立ち回りを強いられていることだ。

「……………」

フェイカーは今一度亡き家族達に目を向けたが、直ぐに視線を切り、霊体化して部屋を去っていった。

最上階へと事態の報告に戻ったフェイカーの目に映ったのは、頭を抱えて狼狽するケイネスの姿であった。

「莫迦な……有り得ん……生命力の強奪……しかも円蔵山からだど？ 霊脈の中心地とはいえ……そんな規格外が……」

ケイネスの口から漏れる呟きを拾ってみると、どうやら彼も独自に敵の魔術を分析していたようだ。

然も、宣言通りに魔術の発生源を探知したらしい。

（成程、円蔵山か。奪った生命力は霊脈に乗せて運ばせているのか

…)

円蔵山は、冬木の管理者である遠坂の邸宅をも上回る冬木最大の霊脈であり、辺り一帯の霊脈が集う土地である。

ケイネスの探査が正しいのならば、現在ホテルに掛けられている魔術はその霊脈を利用したものであるということだ。

だが、円蔵山が特大の霊脈であることを差し置いても、ケイネスの言葉通りこの魔術は規格外であった。

そもそも円蔵山はこの冬木・ハイアットホテルの建つ新都とは反対に位置する深山町の最西端にある。

幾ら霊脈を利用しているとはいえ、そのような遠距離から魔力を操作する技量は異常そのものだ。ケイネスの狼狽も、無理無いものと言えよう。

「ケイネス、しっかりして頂戴。そんなに狼狽えるなんて貴方らしくないわ。それに、フェイカーが帰って来た。ホテルの状況を聞かないと」

それでも、普段の自信と矜持に満ちている態度とはかけ離れたケイネスに不安を覚えたのか、彼の許嫁であるソラウが柄にもなくケイネスを優しく諭していた。

「……………ああ、そうだ。そうだな、私らしくもない。

すまなかつた、そして感謝するよ、ソラウ」

「わざわざ感謝されるような事ではないわ」

その御陰もあってか、ケイネスは完全に落ち着きを取り戻した。それを見てフェイカーはようやく本題を話せるようになったと判

断した。

「そろそろ良いかね、マスター」

「ああ。下の階の方はどうなっていた、フェイカー」

「恐らくマスターの想像している通りだ。私達を除いた宿泊客は全員魂を残さず抜き取られていた」

「そんな……………」

フェイカーの語りにソラウは顔色を青くして思わず口を塞ぐ。ケイネスは対照的に「そうか」とだけ静かに返答した。

「ならば、結界内に居る私達に危害が及ぶ可能性は低いな。忌々しいことだが、凌ぎに徹するしか手はあるまい」

今にも舌打ちでもしそうな苦々しい表情で告げるケイネス。だが彼の表情は、フェイカーの発する言葉によって一変することとなる。

「いや、それは悪手だぞ、マスター。」

我々は今すぐ結界から……いや、このホテルから脱出すべきだ」

「は ……」

表情を驚愕で固めるケイネス。

それ程までに、フェイカーの発言は突飛なものだった。

「なにを……………言っている。狂ったか、貴様？」

「くくつ、私は至って正常だがね、マスター」

「ちつ、いちいち勿体ぶるな。気に喰わん。私は貴様のそういう所が嫌いなのだよ」

「ああ、済まない。では説明しよう。

先ず、私達がこのまま翌日まで結界内で耐え凌いだ場合、まず間違ひ無く聖杯戦争どころではなくなる」

何故か、とフェイカーは続ける。

「一夜にて高級ホテルの宿泊客が大量死した。これがニュースに成らない筈がない。そして我々は唯一の生還者となる。……意味は分かるな？」

「ふん……報道機関共が厄介だと言いたいのか？ そんなもの、暗示や認識を改竄すれば良いだけだ」

「マスコミだけではない。警察のような行政機関もだ。その全てを暗示で黙らし、認識改竄を施すことが可能だとも？」

「……………」

フェイカーが言わんとする事によやく頭が回ったのか、ケイネスは渋い顔をして押し黙る。

その表情が、口に出さずともフェイカーの言を肯定している明確な証拠であった。

「……………
聡明で何よりだ、マスター。」

私は再び下階に降りて、私達がホテルを利用した痕跡を消していく。マスター達は礼装を纏めたり工房を解体しておいてくれ」

.....

.....

.....

フエイカーは昨夜の顛末の回想より意識を覚醒させる。
その後の事は思い起こすまでもない。

ケイネスの愚痴を聞きながらホテルから撤退し、
ケイネスの愚痴を聞きながら新たな拠点を探し出し、
ケイネスの愚痴を聞きながら工房の造り直しを手伝わされ、
ケイネスの愚痴を聞きながら命令を受けて敵の手掛かりを探しに出た。

即ち、現在へと繋がる。

未だにホテルには大量の警察が出入りをしている為、霊体化状態の霊視でしか探れなかったが、やはり敵の情報に繋がるような痕跡

を発見することは叶わなかった。

「ふう……」

このまま成果無く報告に戻ったら、またケイネスの愚痴を聞かされる羽目になりそうだ、と流石のフェイカーも若干憂鬱になりながら踵を返す。

眼前に、大陸^{せかい}が在った。

「……………は？」

らしくもなく気の抜けた声を上げるフェイカーがその正体に気づくのに、数瞬の時間を要した。

大陸の正体は無地の半袖Tシャツにプリントされた世界地図であり、XLサイズのそれを隆々な上半身ではち切れんばかりに着込んでいる、ライダーこと制服王イスカンドルであった。

「いよう、ランサー。一夜振りであるな」

「……………なんでさ」

どっぴりと思考の海に沈んでいたとはいえサーヴァントに背後を取られた己への呆れと、季節外れというかそれ以前に色々問題だらけなライダーへの呆れが入り混じり、自然と馴染み深い言葉がフェイカーの口を吐いていた。

「セイバーに触発されて当代風の衣装を取り寄せ、現代の街を闊歩していけば……よもや同士と相見えるとはのお。気が合うではないか、ランサー！」

「……………私としては道楽目的の君と一緒にたにされるのは、甚だ不満なのだがね、ライダー」

「フハハハハツ！細かいことは気にするでない。どれ、お主も一緒に現代の街を回ってみんか？」

「断らして戴こう。私は今すぐマスターの元へ馳せ参じなければならぬ故にな」

先程までの憂鬱な様子は何処へやら。

フェイカーの心内では、この豪放磊落なサーヴァントの相手よりは己のマスターの愚痴の方が心労が軽いと判断されたようだ。

「なんじゃい、つまらんのお。……………ではランサー、も一つ提案が有るのだが聞いてみんか？」

「……………一応、聞いておこう」

「余は今宵、城を構えているというセイバーの元で酒宴を設え、王の……………ひいては英霊の格を競い合う”聖杯問答”を開催しようと思っております。お主も参加せんか？」

「……………相変わらずだな、君は」

今までの数々の破天荒な行動っぷりから、禄でもない事であろうと考えていたフェイカーの予想を、遙かに越えてきた提案だった。

「なに、強制はせん。だが余はお主にも参加して欲しいがお。」

貴様には問い質さねばならんこともあるからなあ」

ライダーは途中までのチャラけた雰囲気を突如一変させ、征服王の名に恥じない重圧を醸し出した。

ライダーの突然の変化に、フェイカーの身体が強張る。

両者の間に

緊張が走る。

だがしかし、その空気の膠着もライダーが先に雰囲気のを和らげることですぐさま霧散した。

時間としては数秒にも満たなかった。

「では、余は散策の続きでもしよつかのお。楽しみに待つておるぞ、ランサー」

そう言っつてライダーは、巨大な背中を見せつけるようにして去って行った。

後に残されたフェイカーは、ライダーの醸し出した空気と言葉の意味に考えを張り巡らす。

心当たりが、一つだけあった。

(狙撃の件……やはり感づかれていたか)

ケイネスに報告すべきことが増え、フェイカーは頭でも抱えたい衝動に苛まれるのであった。

時は流れて、夜の帳も降ろされた月夜。

丘の上にそびえ立つ広大な冬木教会、その地下の礼拝堂にて魔導通信機を前にして、言峰綺礼は彼の師である遠坂時臣にアサシンの偵察による定時の報告を行っていた。

『ふむ、ロード。エルメロイが急遽拠点を放棄した……か。綺礼、君はこれと昨夜の冬木ハイアットホテルの事件とどう繋がると見る？』

「はい。少なくとも昨夜の事件においてケイネス・エルメロイ・アーツボルトは被害者に価すると思われませう」

『あの事件はロード。エルメロイの仕業ではないと』

「はい。その仮定は矛盾点が多々あります。敢えて説明は省きますが、まず間違いありません」

『そうだろうな、私も同意見だ。ならば、ホテル一棟の宿泊客全ての生命を奪い尽くすなどという凶悪な魔術を行使した者は誰かな？』

「そのような魔術は一魔術師の領域を越えています。十中八九、キ

マスターのサーヴァントかと」

綺礼の答えに、時臣は満足そうに声を上げて頷く。

『ご明察だよ綺礼。そう、今までアサシンを以てしても、マスター共々一切の足取りを掴むことの出来なかったキャスターが、漸く尻尾を見せた。おかげでキャスターの拠点もはっきりとした柳洞寺だ』

「確かに。導師の推測通り、奪った生命力を霊脈を伝って運んだとするならば、必然キャスターの拠点は霊脈の集う場所となります。そして冬木市で最大の霊地といえば、柳洞寺です」

『そうだな。アサシンを柳洞寺の監視に差し向けて貰えるか、綺礼』

「はっ。既に三体程を監視に置いています。

そして次の報告なのですが、よろしくでしょうか、導師」

『構わないよ。続けたまへ』

「はい。昨夜戦闘の行われた倉庫街の外れにて、間桐雁夜の遺体を発見しました。恐らくバーサーカーも消滅したでしょう」

『そう、か。呆気ないものだな。間桐のご老公がわざわざ教会へと正式にマスターの申請に来た時点できな臭かったが………最初から勝負を捨てていたということか』

「どうでしょうか………」

ッ！ 導師、緊急の報告です。

柳洞寺にケイネス・エルメロイ・アーチボルトとランサーが現れました」

『ほう……早速報復という訳か。戦闘の様子は見れそうかい？』

「厳しいですね。柳洞寺に張られている結界のせいでも、自然霊以外は正面のみしか侵入……」
「ッ！ 導師。又しても緊急の報告です。ギルガメッシュがアインツベルンの森にて」

言峰綺礼と遠坂時臣の密談と時を同じくして。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、己の従者であるフェイカーと共に気の遠くなるように長い石段の前に立っていた。その石段は、当然、円蔵山の中腹に構えられている柳洞寺へと続く石段である。

彼らが柳洞寺を訪れようとする目的は、昨夜受けた魔術に対するケイネスの報復だ。

一応、フェイカーはライダーがセイバーの拠点で酒宴を開くことをケイネスに伝えはしたが、其処は彼の私怨の方が勝った。そちらの方には使い魔を偵察に出す程度に留め、昨夜の魔術の主が居ると思われり柳洞寺への襲撃を優先させたのだ。

「いくぞ」

「了解だ、マスター」

言葉と同時に石段へと第一歩を掛け、粛々と登り始める。

石段を登るケイネスの表情は、一見冷静そうである。だがその胸中は憎悪と憤怒に染まり、腸は煮え返っていた。

無理もない事だ。

高級ホテルの後にケイネスらが拠点としたのは新都のはずれにある廃工場であった。貴族然とした生活を送ってきたケイネスがそのような状況に我慢出来る筈もない。されど、どう仕様もなく、ただ苛立ちだけが募っていたのだ。

そんな感情からか、ケイネスの歩みからは激しい力強さが発せられていた。

そして、ケイネスらが石段の中程に差し掛かった時。

両側に茂る木々の群れより、左右からそれぞれ影が一つずつ、ケイネスとフェイカーへ襲いかかった。

奇襲だ。

影はその手に握る岩塊を振り上げ、標的の脳天目掛けて今まさに振り下ろそうとしていた。

しかし、

「フッ！」

「荒ぶれ
Saevio, ventus」

即座に両手に干将・莫也を顕現させたフェイカーと、一小節の詠唱で突風を発生させたケイネスにより、影はその身を砕かれて散った。

だがそれは、開幕の狼煙に過ぎない。

「これは……………」

影は、森の中より続々と蟲のように湧き出て来る。そして、森から出ることで月明かりに照らされた影の正体が浮き彫りとなった。

その正体は、骨格だけで身体が形成された兵隊だった。各々が包丁に近い形状の岩の塊を手を持っている。

操り人形のような無機的機動で、骸骨の兵隊は次々と、フェイカーとケイネスへ襲いかかる。

「チツ
！」

襲いかかった骸骨は、フェイカーの双剣のただ一振りでもたもやその身を粉碎される。しかし、湧き出る骸骨の数が尽きる様相は全く見られない。兵隊の一体一体は脆弱であろうと、数の暴力は闘争において最も効果的であった。

実際に、フェイカーの内心にも僅かな焦りが生まれていた。

「沸き立て
Fevor, mei 我が
sunniguis 血潮」

だが、この男は違った。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、焦りも動揺もなく、フエイカーに守護を任せて諾々と呪文を紡ぐ。

「Automatportum defensio:Automat
oportum 索敵 quarere:Directus inc
Ursio」
攻撃

そして、彼の最強の魔術礼装

ヴォールメン・ハイドラグラム
月霊髄液が覚醒した。

スツと、ケイネスの右手が指揮者コンダクターのように振り上げられ、

「Scalp!」
斬

宣告と共に、零れ落ちていた水銀が鞭のように伸び、先端を数ミクロンの薄さに圧縮することで刃を形成し、超速で振るわれた。

ダイヤモンドですら軽々斬り裂く程の切れ味を誇る一閃は、骸骨共を紙を裂くが如く、容易く両断した。

その光景を満足そうに眺めたケイネスは、

「……先に行け、フエイカー。遺憾ではあるが、雑魚共の駆逐は私が担当しよう。貴様は貴様の為すべきことを為せ」

「了解した」

ケイネスの命令を受け取ったフエイカーは、剣戟を前方にのみ集中させて骸骨の兵隊の群れを突破。

そのまま山門を目指して、石段を駆け抜けて行った。

骸骨共は大した知性が無いのか、離れて行くフェイカーを追おうとはせず、留まるケイネスへと群がる。その数は未だ増え続けており、数の底が知れない。

だが、囲まれているケイネスは余裕を滲ませた笑みを浮かべている。

「さて、貴様らには我が魔術の秘奥の一端を披露してやろう。しかとその目に刻み込むが良い。

……ああ、貴様らには目が無いのか。ならば仕方有るまい。このロード・エルメロイが、自ずから貴様らの身に刻み込んでやろうではないか、骨人形共！

S^斬c a l p ! !」

号令と共に、水銀の斬撃鞭が唸りを上げる。

縦横無尽に駆動する水銀は、骸骨共を次々と八つ裂きに処していった。

石段を一気に突き抜けたフェイカーは、勢いそのままに山門をくぐり抜けて柳洞寺の境内へと足を踏み入れた。

寺の僧たちも寝静まっているのか、背後より聞こえるケイネスの戦闘の残響を除いて、柳洞寺は静寂に包まれていた。

だが、

(……………いる。間違いない無く)

フェイカーのサーヴァントとしての戦闘本能が、この地に打倒すべき敵が潜んでいることを察知していた。

そして、

『 ようこそ、我が神殿へ。歓迎するぞ、フェイカー』

「 ……!!!」

虚空より響いた重々しい声音が、フェイカーに先制攻撃を与える。エクストラクラスである筈の己のクラスを宣告された事は、少なからずフェイカーにとって衝撃であった。

『 ……気に入らなかった？』

フェイカー 贗作屋……………初戦での汝の

闘い様をみる限り、これ以上のものはないと思っただがな」

「 ……そう言う貴様はキャスターで相違ないな」

己の魔術の正体まで見抜かれているならば、今更取り繕っても無駄だと判断したフェイカーは、敢えて否定することもなく質問を以て応えた。

『 ……そうだな。確かに、私はキャスターのサーヴァントだ』

「昨夜、私達の拠点に魔術を仕掛けたのも貴様か？」

『如何にも。本来ならば汝らの魔力を奪い尽くし、我が糧と為す計らいであったが……………流石はかの名高きロード。エルメロイと言ったところか。見事なまでの防御結界であった』

違和感。

おかしい。今コイツは、ナンと言った

？

『それで？ 汝はら何用得我が神殿に参った？ 同盟の申請か？』

「 戯け。報復に決まっているだろう。さつさと表に出るが良い」

『……………ふむ、報復か。それは流石に歓迎しかねるな。しかし、魔術師のサーヴァントに”表へ出る”とは……………汝こそ阿呆である』

「 ならば、無理矢理炙り出すまでだ」

『そう言ったフェイカーの両手には、いつの間にか巨大な弓に矢の形態をした軍神五兵が、番えられた状態で柳洞寺の本殿へと向けられていた。』

それは、倉庫街の闘いを見ていて軍神五兵の威力を知るキャスタ

「からすれば、暗に人質の意味合いを取っていた。
出てこないのならば、本殿へと軍神五兵を撃ち込み、”マスター
ごとく消し去る”というフェイカーの脅迫だ。

しかし、

『クハハハハ！』

そんなフェイカーの行為にキャスターが返したのは、狼狽ではな
く、蔑みを含んだ嘲笑であった。

『ハツ、本殿には住み込みの僧も居る。そんな聖杯戦争と
は無関係の一般人を巻き込んで構わないというならば、撃つて見
るがよい
正義の味方殿？』

「貴様ツ！！？」

吼えるフェイカー。先程のクラスを言い当てられた時とは比べ物
にならない動揺が、彼を襲っていた。

正義の味方

この称号はフェイカーにとって理想であり、憧れであり、夢であ
り、彼の生き様であった。

そして、現在彼が最も忌むべきものである。

だが何よりフェイカーの精神を揺さぶるのは、フェイカーの生涯を知らなければ口に出しようもないその称号を名も知らないようなサーヴァントに呼ばれたことだ。

未来の英霊であるフェイカーの生涯など、それこそフェイカー本人と、例外としてケイネスとソラウしか知りようもない筈なのだ。

しかしキャスターは、フェイカーの動揺を知ってか知らずか。何気ない口調で言葉を続けた。

『とは言え、無辜の民を死なせるのは忍び無い。汝の要請に応えて出て来てやろう。』

突如、静謐であつた境内に唸る轟風と共に、禍々しき魔力の奔流が発生する。

『ただし、相手は私ではないがな。』

丁度手に入れた駒の性能を把握しておきたかつた所だ。存分に暴れる、バーサーカー』

「aaaaaa aaaa a
！！！！！！」

キャスターの声に応えるように、黒い魔力が人型を形成する。顕現するは、闇霧を纏い、漆黒の鎧に身を包む狂戦士。狂気の化身たる黒騎士の咆吼が、空間に軋轢を起こさせる。

今此処に、殺戮の狂宴の幕が開ける。

第十三夜・月下狂吼 - (後書き)

後書き

今年最期になるであろう投稿。

とうとう我が小説の主役ケイネスとエミヤのターンです。

王様たちの酒宴はスキップ！

それ以前にセイバー生きているのかなあ。

アイリスフィールが亡き夫の願いを叶えるためにセイバーと契約するの面白いですかね。アサシン以上に暗殺者な怒り狂った死神舞弥さんもオプシオンで。

それと、お気づきでしょうがこの作品ではジルっちが出ておらんのです。

露骨にジルの出番をカットしていたからとくに気づいてましたよね。

ちなみに転生者なんて無粋な輩はこの小説にはおりません。

とはいえエミヤ出している時点で似た様なものですけど。

ホテルの客皆殺しは月姫のオマージュだったり。

次回、幕間「永遠のお出掛け<遠坂凜の冒険>」

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6439w/>

Fate/IF a tale of the justice

2011年12月20日01時26分発行